

ニュッサのグレゴリオス
『人間創造論』（第2部） 邦訳

秋 山 学

序.

今から35年前（1988年）の春、修士課程を終えたばかりの筆者に、東京大学の宮本久雄教授（当時）を通じて、上智大学のリーゼンフーバー教授（当時）による企画『中世思想原典集成』（全20巻、平凡社）のうち、第2巻「盛期ギリシア教父」に収載予定であるニュッサのグレゴリオス（335-394）著『人間創造論』の邦訳を手がけよとの意向が示された。当時、西洋古典学専修課程にてラテン語文法論の修士論文を書き終えたばかりの筆者には、初めてとなるギリシア教父との出逢いであった。このプランは当初より『人間創造論』（全30章）の冒頭7章分を邦訳するという企画であり、この「盛期ギリシア教父」の巻は1992年に刊行された。この公刊は、筆者が1991年4月より東京大学教養学部・古典語教室に助手として勤務している頃のことであった（～1997年9月末）。

邦訳を通じて西洋中世の主要作品を紹介するという趣旨のため、抄訳がその大半を占める『中世思想原典集成』の性格上、『人間創造論』の拙訳は、こうして部分訳のまましばらく放置されることとなった。もっとも筆者はそれ以降、主たる研究の場を西洋古典学から教父学、特にギリシア教父へと集中させ、勤務校も東京大学から筑波大学に異動することになった（1997年10月～）。2005年からは、ギリシア教父たちの「生活の座」を規定するビザンティン典礼の研究を究めるため、筑波大学海外長期派遣のプログラムにより、ハンガリーでの在外研究に携わることになった（～2006年）。また2015年ごろには西洋古典学会を辞し、日本国内での活動の場を（西洋）中世哲学会へとシフトさせることにした。そして『人間創造論』を訳出したときと同じく、『中世思想原典集成』（第1巻「初期ギリシア教父」）において機会を与えられた、アレクサンドリアのクレメンス（150-215）の全訳（教文館より2018～22年に刊行）を終えることができた。『人間創造論』の未刊部分の拙訳は、この間さ

らに先延ばしにされることとなった。

ニュッサのグレゴリオス自身をめぐっては、この期間中にも論文や研究発表を通じ、研究を中断させていたわけではない。ただ『人間創造論』に関しては、その作中に、「神の像」としての人間の創造との間接的な関連により、創造と質料生成との関係をめぐる、難解にして哲学的な議論（第23～24章）が含まれることなどから、自然と訳筆が遠のいていたのかも知れない。この種の哲学的議論は、教父文献の中では、ニュッサのグレゴリオスに認められる顕著な特徴だと言える。今にして思えば、グレゴリオスによる神の創造行為と質料との関係をめぐる理解は、「パークリ（1685-1752）の非質料主義（immaterialism）と通底する」などとされるため、「古典古代学」専攻であると自称する筆者は、近代に連なる「哲学」に背を向けつつ、関連する問題と対峙することを避けていたとも言える。ただ現実的には、ウェルナー・イエーガー（1888-1961）の創始になるブリル版『ニュッサのグレゴリオス校訂版全集』のうち、現在（2023年時点）でもなお、『人間創造論』だけが未刊であるという状況がここに絡んでいた。イエーガー版全集は、この『人間創造論』を担当する予定であったハズヴィガ・ヘルナー（1927-2019）が没したため、その継承者を得ることなく、全集のうちこの作品だけが未刊のまま現在に至っている。

このような状況に思わぬ衝撃が与えられたのが、2023年11月、上智大学にて開催された中世哲学会第72回大会におけるシンポジウム企画の場であった。具体的には、名古屋工業大学の藤本温（つもる）教授による提題発表においてであったが、藤本氏とはそれまでに数年来、同学会の委員会活動などを通じて親しくお付き合いさせていただいていた。藤本氏はこの発表において、『人間創造論』の前半は秋山によって訳されているが、後半が未刊である旨を明らかにされた。藤本氏のこの指摘は、『人間創造論』が、哲学ことに西洋中世哲学界にあって、議論のための典拠として参照されるということ、そして筆者が未訳部分の拙訳を速やかに完成させるべきことを認識させた。筆者は学会終了後、藤本氏に謝意を表すとともに、早速訳筆を採った。折しも本学筑波大学は、翌2024年、上智大学に続いて中世哲学会の大会開催校を引き受けていたため、この大会開催に合わせて『人間創造論』の完訳を披露できるよう、筆者は訳出を急いだ。藤本教授、および当初、筆者に本作品を委ねて下さった宮本教授と故リーゼンフーバー教授に、この場を借りて改めて感謝の意を表する次第である。

本稿を「人間創造論 第2部」と題するのは、上述のように『中世思想原典

集成2 盛期ギリシア教父』(上智大学中世思想研究所編訳／監修平凡社)に所収の拙訳「ニュッサのグレゴリオス『人間創造論』」(同書483-504頁, 1992年9月)をもって, 筆者訳になる「人間創造論」の「第1部」と見なすことを含意している。筆者が, この「第1部」に必要な訂正を施すとともに, 上・下の注記を充実させ, 合本としていずれ公刊する希望を抱いていることは言うまでもない。ただ本稿を「第2部」とは名づけたものの, 第7章と第8章の間に内容の本質的な切れ目があるとは考えられないため, この「第2部」という呼称は, 『人間創造論』という作品そのものの区分と一致してはならず, 単に公刊の上での外的な都合を示すに過ぎない。

さて, 『人間創造論』全体の概要と内容梗概については, 既出の平凡社版(すなわち拙訳による『人間創造論』第1部)の冒頭に掲げた解説に譲りたい。可能な限り, この度この『人間創造論』の全体訳を圧縮し, 一度に公けにしたいという意図によるものである。したがって注釈等もすべて削り, 聖書箇所の特長表示を訳文中に組み入れるにとどめた。拙訳のための底本としては, ミーニュ版「ギリシア教父文献集成」*Patrologia Graeca*の第44巻144頁～256頁に所収のテキストを用いる。訳文中, 各章冒頭に掲げたのはこのミーニュ版の頁数と位置表示である。以下に示すスルス・クレチエンヌ版(「仏語訳」②)は, 古典語と仏訳の対訳版を基調とする同叢書にあっては珍しく, 仏訳しか載せていない。つまり現時点で『人間創造論』の原典テキストは, 一般的にはミーニュ版しか存在していないということになる。ただ, 2013年に公刊されたチェコ語版は, このミーニュ版のテキストを底本としてチェコ語訳を右頁に付しているのであるが, 段落分けや誤植の訂正などの面で, ミーニュ版に対し校訂上の批判的な目を注いでいる。したがって本稿では, 段落分けにおいて, このチェコ語版に依拠することにした。その意味で本訳は, 上記平凡社版とは, 厳密に言って底本を異にする。

近代語訳としては, 以下のものを参照した。聖書典拠などに関しては, チェコ語訳の脚注が新しく詳しい。また, 以下訳文中に付したナンバリングは, 下記英訳書の中に振られている節番号を踏襲したものである。

- ・伊語訳 *Gregorio di Nissa: L'uomo*, traduzione, introduzione e note a cura di Bruno Salmona, Roma 1991.
- ・仏語訳 ① Grégoire de Nysse: *La création de l'homme*, introduction par J.-Y. Guillaumin et A.-G. Hamman; traduction par J.-Y. Guillaumin, Paris 1982.
- ② Grégoire de Nysse: *La création de l'homme*, introduction et traduction par Jean

Laplace; notes par Jean Daniélou, Paris 2002.

- ・チェコ語訳 Řehoř z Nyssy: *O stvoření člověka*, Úvodní studie, překlad a poznámky Magdalena Bláhová, Praha 2013.
- ・英訳 Gregory of Nyssa: *On the Making of Man*, translation with Notes by Rev. H. A. Wilson, in: A Select Library of Nicene and Post-Nicene Fathers of the Christian Church, 2nd Series, vol.V, 386-427, London 1982.

この『人間創造論』後半部にあつては、グレゴリオスが駆使する医術関係の語彙と知識の豊富さ・深さが特に顕著である。その背景には、アリストテレス（前384-322）による解剖学的生物学の伝統に発し、ガレノス（130-200ごろ）らローマ医術家たちにより蓄積された学識と経験があつて、グレゴリオスが丹念にそれらの吸収に努めた痕跡がうかがわれる。教父文献ないしギリシア教父文献の中で、これほどまで人間構造の細部にまで及んでその機能をめぐる考察を施した論考は稀有であると言つて過言ではあるまい。その考察は、必要な聖書典拠を交えて神学的考察に付され、復活をめぐる教義にまで及ぶ（第25-26章）。この『人間創造論』は、西洋中世スコラ期の文献に遠く先駆け、哲学と神学の妙なる調和を見せる価値の高い論考であると言つて差し支えないだろう。

— • —

ニュッサのグレゴリオス『人間創造論』 邦訳 (第8章～第30章)

第8章 人間の形状が直立したものであるのは、何のためであるのか；

両手が理性のためにあること；

その過程で、靈魂の差違に關しての哲学も述べられる。

(PG44, 144B) 1. 人間の姿勢は直立しており、天に向かって伸びていて、上を眼差している。これは棟梁的なものであり、王としての尊嚴を意味するものである。というのも、存在物のうちで唯一人間だけがこのようであるのに対し、他の動物にあつてはすべて、その身体は下向きである。この点は尊嚴の相違を明確に示している。すなわちこれは、支配に服するものたちの尊嚴と、それらの上に立つ者たちの権限の違いである。まず他のすべての動物にとって、

身体の前の部分にある四肢とは両足である。屈みこんだその姿勢が、支えるものをかならず必要とするからである。ところが人間の構造にあっては、両手はその四肢となっている。直立した姿勢であれば、必要上、土台は一つで十分なのであって、二本の足で安全に立ち姿を支えられるためである。

2. そればかりでなく、言語を用いる上でも、両の手の奉仕は協働者となっている。そしてある人は、両手の奉仕は理性に適う本性の固有性だと述べているが、これはすべての点で誤っているわけではない。彼らは、この共通のそして通常の点に向け、思惟という観点に基づいて訴える。すなわち、両の手の優れた資質によって文字で理性を表し出すことを引用する(われわれが文字によって発語する、つまりある意味で手を通じて対話することは、字母の特徴をもって声を保持しているのであり、理性による恵みに与らない話ではないというわけである)。もっともわたくしは、別の側面に目を向けたいと思う。わたくしが言うのは、理性を言表するに際して両の手が協働するということである。3. だがこの点について検討する前に、われわれは示された提題を考察しよう。

被造物が成った順序は、少しばかりわれわれの関心から逸れている。大地から育つ植物の芽は、何のために先導し、動物たちの非理性性が後続し、これらの生成の後に人間が創られるのであろうか。おそらくわれわれは、容易に考えられる事柄を、この点を通じて学び取ることができる。それは動物にとって、創造主には植物が有用であり、家畜は人間のためだと映るということである。そのために、家畜より前に食糧が、また人間よりも前に人間の生命に仕えることになるものが創造されている。4. だがわたくしには、これらの記事を通じてモーセは隠された事どもに関する教説を明らかにし、靈魂に関する哲学を言葉に尽くすことのできないものを通じて伝えているように思われる。その哲学については、外界の教養が幻想していたものであるが、それは明瞭な形で考え抜かれたものではなかった。

御言葉はこれらの事柄を通じて、われわれに対し、三つの差違のうちに動物のまた靈魂の力を観想することを教えている。つまりまず、単なる成長のためだけの、育て上げる力、育まれるものの増加に相応しいものを増し加える力である。これは本性的力とよばれるものであるが、植物に認められるものである。植物の中には、何がしか感覚には与らない生命力を認めることができる。これに加えて別の生命の種類があり、これはいまの点も含むものであり、感覚による部分をも統御するものだとわれわれは了解している。それは、理性性に与

らない動物の本性のうちにあるものである。動物は成長し繁殖するだけでなく、感覚による働きと掌握をも有しているからである。けれども身体における完全な生命とは、理性に与った本性、すなわち人間的な本性のうちに看取される。これは育ち知覚して、理性にも与り、知性によって統御される生命性である。

5. われわれには、主題に関して次のような分割が成立するであろう。それはすなわち、存在物のあるものは知性的であり、またあるものはまったく物的である。いま、知性的なものの固有性に従っての分割は、放置しておこう。論述は、このような事どもに関わってはいない。総じて、生命に与らないけれども生命の働きに与るものがあり、これらは物的なものに属す。また感覚とともに生きるが感覚に与らないものは、生命ある身体的なものに属す。次いで、感覚的なものはさらに理性的なもの、理性に与らないものに分けられる。それ故にまず、生命を欠く質料の後、靈魂を有するものどものイデアの言わば柱礎として、この本性的な生命が成立したと、かの立法者（モーセ）は述べている。すなわちこの生命は、植物の芽のうちに予め存するのである。しかる後立法者は、感覚によって統御されるものどもの誕生を加えて述べるのである。これと同一の連関（アコルーティア）に従い、肉を通じて生命を分け持つものどもの中で、あるものは感覚的である。これらは知性的な本性なくして、自らの上に存在し得るが、理性に関わるものは、感覚的なものと混淆しないかぎり、他の仕方では身体のうちには成立しない。それ故に人間は、植物の芽や家畜の後、最後に創造されたのである。つまり自然は、完成に向けてある道を辿りつつ順序良く進むのである。

人間は理性的動物として、あらゆる種類の靈魂を混入される。まず、本性的種類の靈魂に則って育まれる。一方感覚の種類は、成長の力に沿って増し加わり、知性的およびより資料的な実体の固有の本性に従って、その中間の位置を占める。つまり、知性よりも資料的で、資料よりも浄らかなのである。しかる後、感覚的本性の繊細で光のような性質に向けて、知性的な実体のいわば同化と混淆が生じる。これはつまり、人間が上述の三つのものうちに自らの成立を負っている所以である。われわれは、使徒からもそのようなことを学んでいる。使徒は『エフェソスの信徒たちへの書簡』において、彼らのために祈りつつ、主が顕現する際には、身体・靈魂・霊のまったき恵みが守り抜かれるように、と祈っている（1テサロニケ5:23）。彼は成長する部分と言う代わりに身体と言い、感覚的部分を靈魂という表現で表し、知性的部分を霊という言葉方で表している。ちょうど同じように、主は福音を通じて律法学者を教育

している(マルコ12:30)。すなわち主は、すべての掟に優先して神への愛を置くが、この愛とは、心と靈魂と思惟のすべてを通じて働くものである。この個所において、御言葉は上と同じ差違を意味しているようにわたくしには思われる。つまり、心とは身体的な状況、靈魂とは中間的な状況、そして思惟とはさらにより崇高な本性、つまり知性的にして創造的な能力を述べたものである。

6. ここから使徒は、自由意志の三つの区分についても知悉している。すなわち、彼が肉的和名づけているのは、腹や腹をめぐる放縱に囚われる部分である。一方魂的と言われているのは、徳と悪徳との中間に位置する部分であり、後者を凌駕するが、前者には純粹には参与しない部分である。そして靈的と呼ばれるのは、神に従った生き方の完全性を觀想する部分である。それ故に使徒は『コリントの信徒たちに宛てた書簡』の中で、彼らの享樂的で情動にあふれたあり方を批判しながら、あなた方は肉的和であって、より完全な教説を受け入れることができない、と言っている(1コリント3:1)。また別の箇所で彼は、完徳に向かう中間部のいわば比較を行い、こう言っている。「魂的な人は靈に属す事柄を受け入れない。なぜなら、彼にとってそれは愚かなことだからである。一方靈の人は全てを判断するが、その人自身は誰によっても判断されることがない」(1コリント2:14-15)。かくして魂的な人は肉的な人を凌駕する一方、同様の類比により靈的な人は魂的な人を越え出ている。

7. したがってもし聖書が、人間はあらゆる動物の後に、最終的なものとして成ったと述べているのであれば、立法者はわれわれの靈魂・生命について哲学を施し、順序の上での何らかの必然的な連関に沿って、最終的なものうちに完全性を見抜いている。すなわち、理性に与る部分においてそれ以外のものも包摂される。しかるに感覺的部分のうちにも、本性的形相は完全な形で存する。だが資料的な部分には、本性的形相のみが看取される。というわけでおそらく本性は、より小さなものから完全なものへと、さながら段階を踏むかのように、すなわち生命の諸特質を経ながら、上昇を遂げてゆく。

8. 人間は理性的な動物であるから、身体中の器官が理性の用に相応しく創造されることが不可欠である。例を挙げることにしよう。音楽家は、樂器の種類に合わせて音楽を演奏するのに腐心する姿が見られる。つまり豎琴を使って笛を吹く者はいないし、笛でもって弦を奏することもない。これと同じように、理性には諸器官の統御が伴うべきなのであって、それは言葉の用に合わせ、音声を発する部位によって適切に刻印され、響きが形作られる必要があ

る。そのために両の手が身体に据えられているのである。なぜならもし、両手という、装置に富み多くを統御する器官が、すべての技とすべての働きのために、生に関わる用途にとって便利なのであれば、その働きは、戦時にも平時にも適切に関与して、その用途が何千も数え上げられ得ることであろう。だが他の動物とは異なったかたちで、本性は理性のために、この両の手を身体に加えた。もし人間が両手を授かっていなかったなら、人間はさながら四つ足動物にも似て、食料を得る上で適切に、顔の諸部分が形成されていたことであろう。その結果、顔の形は間延びし、鼻の上に細く伸び、口には固くしっかりとして分厚い唇がかぶさり、草を噛み砕くのに適して、歯の内側には別の舌が備わっていたことであろう。つまり何かそのような、肉付きの良い、不協和音を放ち荒々しく、歯の下にでき上がったものが、上下の歯との協働のうちに動きを遂行することになる。あるいはこの舌は、湿り気を帯び、平たく延びているかも知れない。たとえば犬や、その他生肉を食らう動物の舌がそうであるようにである。それらの動物の舌は、のこぎり状の歯の間から、ある隔たりのうちにはみ出している。

かくしても、両の手が身体の脇に添っていなければ、どうしてこの身体に、明瞭な言葉が刻印され得ようか。口の周囲の部位の構造が、声の使用のために併せ形作られていないことになるのだから。するとおそらく、人間は鳴いたり、啼いたり、吠えたり、嘶いたり、牛やロバのような声を挙げたり、あるいは何か獣のような唸り声を発したりすることが必定となるであろう。だが今や、手が身体に備えられたため、口に余裕ができて言葉に奉仕できるようになった。というわけで両の手は、理性に適う本性の特質を明瞭に示している。そしてこのようなかたちで創造者は、すべてを通じ、理性にとっての良きあり方を考えているのである。

第9章 人間の形状は、理性を使用することのために 機能的に構成されていること。

(PG44, 149B) 1. さて創造主は、われわれの形状に、いわば神の姿ともいべき恵みを賜物としたため、この「像」のうちに、神固有の様々な善き事どもの類似性を込めた。それを通じて神は、それ以外の諸々の善をも、敬意をもって人間の本性に与えたのである。しかるに知性と賢慮とに関しては、これを神が完全に与えたということは不可能であるが、神が人間にその一部を分け持たせたということは真実である。すなわち神は人間に、自らに固有の本性の

飾りを、この「像」のうちに注入したのである。かくして知性とは、知的にして非物理的な財産なのであるから、この恩寵を、共有されざる仕方・交わらざる仕方では有することになったかも知れない。もし何らか、この知性の運動が明らかになることがなかったとすればである。そのために、運動のための機能的な構造が加えて必要とされることになった。すなわち知性は、さながら撥のように、音を出す部位に触れつつ、いかなる音形声によってであれその成型を通じて、内的な運動を表現することができるようになっている。

2. ちょうど音楽の術に通じたある人が、病苦のために自身の声を出せないという状況にあるとしよう。だが彼は、自身の術知を明らかにすることを望み、他種の音で旋律を奏でることにして、縦笛ないし竖琴を通じて自らの技を披露する。それと同様に人間の知性は、ありとあらゆる種類の想念の発見者であるが、身体的な諸感覚を通じては、靈魂が思惟の勢いを示すことができないために、さながら術知に通じた調整者のように、靈魂のこもった器官に触れ、そのうちなる響きを通じて隠れた想念を明らかにする。

3. かくして人間の器官は縦笛や竖琴と化し、混ざり合って音楽を奏でるのである。それはちょうど、合唱の際に、互いに声を合わせながら同じ旋律を歌う者たちにおけるのと同様である。息吹は肺を通じて、息吹の受け皿となる器から押し出される。それは発語される事柄の勢いが、発声に向けて部位を調節する際、内的な衝撃に調合させる場合と同様である。その衝撃は、縦笛の形をしたこの通路(気管)を円環状に捉えるが、さながら縦笛によって生じる音を模す。ちなみにこの気管は、卓越した膜質でもって円環状に取り囲まれている。一方口蓋は、下部より来たる声を、口蓋部分に存する空洞に受け止める。この空洞は、鼻腔にまで伸びる二つの縦笛となっている。いわば卓越した鱗(うろこ)のごとくに、水切りボウルの周りの軟骨でもって声を切り分け、響きをより鮮明なものに作りなす。頬や舌、喉の周囲の部位は、それを通じて、顎が弛緩すれば窪みとなり、緊張すれば張り詰める。これらがすべて、弦における撥の運動に、多彩にまた様々な形で仕える。時宜に応じ、卓越した迅速さをもって、必要に応じて緊張度を調整するのである。唇の切れ込みや閉ざしも、指を使って縦笛の息吹を調節するのと同じように、調への調和を形作るのである。

第10章 知性は諸感覚を通じて働くこと。

(PG44, 152B) 1. さてこのようにして、上述のような知性の機能的な仕

組みを通して、われわれのうちで知性を通じ、理性・御言葉が歌う結果、われわれは理性的動物となった。思うにもしわれわれが、食す行為に際し、奉仕の重さと労苦とを、身体の使用に照らして昏に委ねていたならば、われわれが御言葉の恩寵を有することはなかったであろう。だが今や、両の手はそのような奉仕を自らへと転じさせ、口を理性への奉仕のために整えられた状態に置いた。

2. 口というこの器官に関して、その働きは二様である。その一方は響きを為すことであり、もう一方は外界からの想念を受け入れることである。だがこれらは相互に相交じり合うことがなく、本性の上でそこに定められた当該の働きに留まり、隣人を煩わせることはない。聴覚が語ることもなければ、声が聞くこともないのである。というのも、声は常になにがしかを必ず発するが、聴覚は受け取っても決して充満することはない。それはソロモンが述べているとおりである（コヘレト 1:8）。3. わたくしには、次の点は、われわれの内なるもののなかで、取り分け驚嘆するに値すべきもののように思われる。聴覚を通じて注ぎ込まれるすべてのものがそこに流れ込む場としてのわれわれの内なる空間の広さとは、一体何なのであろうか。聴覚のうちに導きこまれる言葉の記憶装置とは、一体いかなるものなのであろうか。また聴覚に納められる想念の器とは、一体どのようなものなのであろうか。そして、多くのまたありとあらゆる種の事どもが互いに挿入されるとき、どうして、そこにある事どもが互いの位置関係に関して混同と混乱を生じないのであろうか。おそらく視覚の働きに関しても、人は同じように驚嘆することであろう。というのもこれらの感覚を通じて、知性は身体の外界にある事どもを、似たような形で掌握するのであり、映じた事どもの残像を自らへと引き込み、目に映るものの輪郭を自らのうちに刻み込むからである。

4. そしてたとえば、ある広域に及ぶポリスがあり、様々な入り口からこのポリスに赴く人々を受け入れることができたでしょう。ポリスの中にある施設に関して、すべての人々が同時に殺到するわけではなく、市場に向かう人もあれば、屋敷に赴く人もあり、他の人々は教会へ、また別の人は広場へ、ある人々は路地へ、また劇場へ、それぞれに固有の判断に従って赴く。われわれのうちに埋め込まれている知性というポリスにあっても、これと同じような状況をわたくしは想定する。このポリスを、感覚を通じての入場が様々な形で満たしている。しかるに知性は、入り来る者たち各々の出自を十分に調べ、よく吟味し、意向に沿った場所に据える。5. そしてちょうど、ポリスをめぐっての

この譬えに於けると同様に、しばしば、同族のまた生まれを同じくする者たちが、同じ門から中に入って来るわけではないという状況が生じる。各々の者が、それぞれたまたま別の入り口から入っては来たけれども、城壁の囲いの内側には間違いなく到達し、改めて互いに遭遇して、相互に関連があるのだということが理解されるのである。というのも、異国出身で互いに名も知らぬ者たちが、しばしばそのポリスに一度だけ入場するものの、入場の際の共通性が、彼らを互いに結び合わせるといえることはない、というケースがほとんどだからである。ポリスの中の住民となれば、同族の者と判断されうる。そのような状況は、知性をめぐる場の広さに関しても認めることができよう。しばしば、さまざまに異なった感覚から、一つの認識がわれわれに生起しつつ、同一の問題が諸感覚へと多様な形で分割されるということがあり得る。しかしながら逆に、何か一つの感覚から、多くのまた多様な事ども、本性的には互いに共起しないことを学び取ることもできよう。6. たとえば(例示によって論述をより強力に明瞭化することができよう)、飲料の特性について探る必要があるとしよう。感覚的に甘美であるのは何か、味わう者どもは何を避けるべきか、といった点である。いかにも、味見によって胆汁の苦さとか、蜜にも似た質の柔和さなどは判明する。しかしながらこれらは異なっていて、同じ物質が一つの認識をもたらしはするものの、多分化され、味わい、匂い、聞いた感じ、さらに時には肌触りや見た目など、思惟のうちに多様に、自らを住み分けさせることになる。人は蜜を目にした場合、その名前を目にし、味わい、臭覚を通じてその香りを認識し、肌で触って確認することにより、同一の物質を、感覚各々を通じて識別するのである。7. さらにわれわれは、何か一つの感覚を通じ、多彩にして多様な事柄を学び取る。聴覚はありとあらゆる声を受け取り、両眼による把握は、異なった種類のものの観察に用いる働きを、差別なき形で有する。というのも視覚は、黒いものにも白いものにも、そして色に関して逆の性質を持つものすべてにも、同様に働きを及ぼす。味覚、臭覚、接触を通じての認識もすべて同様であり、ありとあらゆる種類の物体の各々に対し、それぞれに固有の把握を通じて認識を果たすのである。

第11章 人間の本性は目に見えないこと。

(PG44, 153C) 1. では一体、感覚的諸能力のうちに自らを分かち与え、その各々を通じて相応しい形により、諸存在物に関する認識を行う知性とは、自らの本性に照らして何であるのだろうか。知性が諸感覚以外の何ものかであ

るということに関しては、思慮ある者なら疑うことがないとわたくしは思う。もし知性が、感覚と同一のものであるのなら、感覚によって営まれる働きに固有の性質を、知性は間違いなく一なるものに減じてしまうだろう。なぜなら知性とは単純なるものであり、単純なるものの中には、多様なものは何ら見出されないからである。けれどもさて、触覚と臭覚とは別であり、他の諸感覚もそれと同じように、互いに通交性を欠き、混じり合わないようになっているということに関しては、すべての者が同意するであろう。知性が、各々の感覚のうちに、等しく相応しいかたちで現存するためである。したがって、知性とは、定めし感覚的本性とは別の、何か他のものだと仮定せざるを得まい。知解されるもののうちに、何か異種のもものが混じり合うことのないようにするためである。

2. 使徒は言っている。「誰が主の知性を知っているだろうか」(ローマ 11:34)。だがわたくしはこれに加えて、「誰が自らの知性を知っているだろうか」と問いたい。神の本性を自ら理解しようとする者たちは、自らを知悉しているかどうか、言ってみるがよい。彼らは自らの知性の本性を認識しているだろうか。知性とは多くの部分から成り、多くから成る複合物である。だが知性的なるものが、どうして複合物のうちにあるだろうか。あるいは、異なった起源のもの混淆のあり方というものは、いかなるものなのだろうか。むしろ知性とは、単純にして非複合的なものである。またどのようにして、知性が感覚性を、多部分より成る状態のうちに散在させるのだろうか。どのようにして、多性が一性のうちに置かれるのだろうか。いかにして、一が多のうちにあるのだろうか。3. けれどもわたくしは、この難題の解決策を、神の言葉そのものに馳せ参じることによって知る。それは「われわれは人間を、われわれの像そしてまた似姿として創造しよう」(創世 1:26) という、神が述べた言葉である。原型をめぐって想起されるものはいかなるものにも、像が欠けていない場合、それはまったき意味で像である。しかるに、もとの型への類似性から逸れる部分があるなら、その部分に関しては像ではない。というわけで、本質の把握しえない部分は、神的な本性をめぐって看取される部分の一つであるから、あらゆる必然性においてこの部分のうちにも、像は原型への類似性を有している。4. たとえ像の本性が理解されとしても、原型は理解されえない。この点に見出される事柄の対立が、像において間違っている点を立証する。けれどもわれわれの知性に関する本性、すなわち創造主の像に由来する部分が認識の枠を越えているならば、像は、超越的なものに対する正確な類似性を有している。

自らに関わる知られざる部分によって、理解不可能な本性を特徴づけることになるためである。

第12章 (靈魂の) 棟梁的部分はどこにあると考えられるべきかについての詳説。その中で、涙と笑いについての本性論、および質料、本性、知性の相互関係についての自然学的考察も行われる。

(PG44, 156C) 1. さて知性的な働きを、何か身体的な諸部分に閉じ込める者たちの推論を尽くした虚しい議論については、沈黙していただく。彼らのある者は、その棟梁的な部分が心臓にあると主張する一方、別の者は、知性は脳髄のうちに据えられていると述べ、そのような思いつきを、いわば表層的なもっともらしさで強めている。まず知性の棟梁性を心臓に置く者は、論述の証拠を、心臓の場所的な位置に求めている。これは、心臓が全身のほぼ中央の場所を占めているように思えるということによるが、それは自由意志の運動が、中央部から全身へと容易に分かたれるように働きへと進みゆくということに基づく。そしてこの論述の証拠立てのために、彼らは人間の苦しみや憤怒に関わる気質を引くのであるが、その際、そのような諸情動は心臓の部分に共苦に向けて連動させると言う。一方、脳髄をこの推論の上で配する人々は、頭部は本性的に、いわば全身の中のアクロポリスの如くに備えられているのだと主張する。つまり知性は脳に、いわば誰か王が住まうように位置していると言うのである。ちょうど諸感覚器官が、伝令使か盾持ちのごとくに取り巻いて、知性は環状に防御されているというわけである。彼らがそのような推測をする証拠とするのは、脳の皮膜を損傷した者たちの推論は正当性を欠くということ、そして酩酊のうちに頭が鈍重になる者たちは適切なことを知らぬままに過ごすということ、以上2点である。

2. さらに彼らは、棟梁的部分に関するこのような推論に関して、いかばかりか自然学的な理由を付け加える。各々上のような憶測に沿った形である。つまりある者は、思惟の運動は火炎的なものと同起源性を有すると言う。火炎も思惟も、常に運動するものだからというのである。さらに、温かさは心臓のある部分に遡るのが認められる。それ故に彼らは、温かさの親運動性には知性の運動が混ざるのであり、心臓は知性的な本性の器であるとする。心臓のうちに、熱が取り込まれるというわけである。一方別の人は、すべての感覚器官に対し、言わば足台あるいは根のような役割で、皮膜が存していると言う(彼らは脳髄を覆う膜をこう名づけている)。そしてこの説を立てる者には、独自の

論が信じられている。その説によれば、この部位による以外、他の器官には、思惟的な働きが拠点としている場所はなく、脳髓の部分では耳も調整されて、自らに降り注ぐ音を遮断するようになっていっていると言う。また視覚も、両の眼の座をなす基底部によく備わっていて、両の瞳に入り込んでくる映像を通じ、内側へとその刻印を形成するのだという。また香りの質も、臭覚の吸い込む働きを通じ、この脳髓において判別されるのだという。また味覚に関わる感覚も、皮膜の判断によって吟味され、隣接する部位において、自らより発する何がしか感覚的な筋質の根を、首の脊椎を通じて、濾過器のような形をした管に向け、その場の筋肉によって混ぜ合わせるのだと言う。

3. だがわたくしは、靈魂の思惟的部分がしばしば諸情動の支配によって攪乱されること、そして推論能力が何がしか身体的な状況によって本来の働きから鈍らされることが真実であるということ認める。また心臓が、身体における火炎的なものの言わば源泉であって、憤怒の衝動に向けて突き動かされるということも認める。さらにはこれらに加え、これら自然学的理論を立てる者どもの論によれば、皮膜が感覚諸器官の下部に置かれ、自らのうちに脳髓を包摂し、そこからの蒸散物に染められるということも認めよう。解剖学的な立論に時間を浪費する者たちから、このような説を耳にする際、わたくしはこのような見解を否定するものではない。わたくしは、非物質的な本性が何か場所的な輪郭によって捉えられ得るということについて、その論証を行うつもりはない。

4. 精神錯乱は単なる泥酔のみによって生じるのではなく、肋骨を縛る皮膜が情動のうちに置かれることによっても、思惟の能力は同じように不具合を来たすということについて、医術の識者たちがこれを定説としている。彼らはこの情動を「錯乱」(フレニティス)と呼んでいる。なぜならそのような皮膜の名とは「フレネス」だからである。さらに、苦痛ゆえに生ずる共感というものが、心臓に遡ると誤って想定されている。というのも心臓ではなく、腹部の口が痛めつけられることによるからである。その情動は、彼らの無知のために心臓へと転化されているのである。

情動について正確に観察を行った人々は、次のようなことを述べている。すなわち、諸々の管の衰えと閉鎖が、苦痛を伴う感情の中で本性的に全身にわたって生ずると、深部にある空間に向けて、排出を妨げられたものすべてが押し込まれる。そこから、呼吸に関わる内臓部が周辺部位によって狭められ、しばしば呼吸時の吸入が本性的に不自然となる。降りかかった不都合の解消のた

めに、狭まったものを拡張しようとするためである。さて、そのような呼吸のあり方を、われわれは苦痛の兆候と受け取り、これを溜息また憤慨と名づけている。しかしながら、心臓の周囲の部位が圧迫されるような症状も起こる。これは心臓の不快ではなく、胃腸の開口部の不快となるが、これも同じ原因によるものである。すなわちこれは、諸々の管が崩壊するという原因を指すものであるが、それは胆汁を含む器官が、かの酸質の嘔むような液を、限られた空間の下で、腹部の口に向けて注ぎ出すことによる。このことの証拠は、苦痛に苛まれた者の表情が黄色になり、黄疸に罹ったような様になることであるが、これはあまりの苦悶のために、胆汁が血管に自らの液をまき散らすことによる。

5. だがそればかりでなく、逆の情動も生じるのであって、それは喜びによって生じる笑いのことである。この笑いもまた、ここでの論拠を補強する。つまり、快楽が原因となって何らか聴覚が快反応を起こすと、そのために身体中の諸々の管が解けて開くというものである。というのも前者の苦悶の場合においては、苦痛のために細くかつ不鮮明となった管の呼吸活動が呻吟するとともに、内臓の内側の状態をも狭隘にし、頭部と皮膜における湿分の発散を圧迫する。この蒸散は、脳髄の空洞部に於いて大いに遮断され、底部にある管を通じて両眼の方へと押し出されて、眉毛の集合部が雫の湿り気によって引き寄せられる(その雫は涙と呼ばれる)。同様にわたくしには、後者の喜悅の場合も次のように考えるべきだと思われる。すなわち諸々の管は、普段に比してより大いに拡充され、これらを通じて息吹が底部へと引き込まれる。さらにそこから本性的に口許にある管を通じて押し出され、すべての内臓、とりわけ肝臓が、彼らの説によれば、ある種の混乱と沸騰運動によって、その種の息吹を押し出すことになる。そこから本性は、息吹の排出を通じて何らか安定的状況を生み出し、口許の管を拡げ、その両側では呼吸のために頬を緩めることになる。この現象の名前は「笑い」である。

6. だからと言って、この結果肝臓に棟梁部があると考えるべきではなく、また憤怒の感情が生じた際に、心臓周囲部における血液の沸騰があるからというので、知性の座が心臓に存すると考えるべきでもない。むしろこれらは、身体上の構造上の問題へと遡源させられるべきものである。一方知性は、諸部位の各々に均等な形で、混淆の表現し難き論理により結合せられていると考えるべきである。7. 何と、ある人々がこの点に関して、聖書も棟梁の部位が心臓であることを証言しているという説を提示しているが、われわれとしてはこの論を吟味しないまま受け入れることはできない。なぜなら心臓のことを想定

し、腎臓のことを指して次のように言う人があるでしょう。「神はあなたの心臓と腎臓を究める」(詩編7:10)。その結果、彼らは知的部分を、その両方に閉じ込めるか、もしくはどちらにも限定しないことになるのだから。

8. しかるに知性の働きは、ある種の身体状況によっては鈍化したり、あるいは完全に停止してしまったりするということをわたくしは教わっている。わたくしはこれを、知性の力がどこかある場所に限定されるということの十分な証拠とはしない。たとえば、その部位に生じる粘液によって、本来の部位の空間的広さが制限を加えられるといった具合である。というのも次のような見解は身体論的である。たとえば、何か中に詰まった物質のために血管が塞がり、他のものがその中に場所を見出せない、といった場合である。というのも知性的本性は、身体の空虚の部分に住まうこともなければ、身体の余計な部分に押し出されるということもない。むしろ全身は、何か音楽の楽器のように制作されているのである。ちょうど、旋律を奏でることができる人々であっても、楽器がその無用さゆえに技を受け取ることができないがために、術を披露することができない、といったケースがあり得る(つまり、時間経過のために傷んだか、落として壊れたか、何かサビかカビのために損なわれたか、たとえその道の大家と思われる人が、縦笛の術をもって息を吹き込んでみたところで、いずれにせよ音が出ず働きを為さない、そのような場合である)。ちょうどそれと同じように知性もまた、器官全体に及んでいて、知性的な能力に相応しい形を採る。このためにその本性的な状態に沿って、各々の部位に寄り添い、本性に従った状況にある部位に対しては、その固有のあり方を目覚めさせる一方、知性の技術的な運動を受け入れる力を欠く部位には、使わず働かぬままであるようにさせるのである。知性とは本性的に、本性に従って置かれている部位に対してはそれに適ったあり方で寄り添い、そこから逸れた部位に対しては、異なる方向に向ける仕方です接するからである。

9. わたくしに思われることには、この部位に関する考察はやや自然学的であって、ここからさらにより優美な教説を学ぶことができる。すなわち、万物のうちで最も美しくまた最も卓越した善とは神性であって、そこには、すべて善への希求を持つ限りのものが向かう。それ故われわれは、知性もまた、最も美しきものの像となったのであるから、原型への類似性に与かる限り、可能な程度において、知性自身もまた、美のうちに留まると主張する。だがもし知性がこの善から外に逸脱するということになれば、そのうちにあったはずの美を剥ぎ取られてしまう。われわれは知性が、原型の美の似姿によって飾られてい

ると述べた。それはたとえば、そこに映るものの姿を映し出した鏡の如きものである。ちょうど同じ類比によりわれわれは、知性そのものによって本性が経綸のうちに置かれていると考える。そしてその本性もまた、そこに付随する美によって飾られていて、いわば鏡の鏡と化していると考える。しかるに本質(ヒュポスタシス)の質料的部分は、この本性によって支配され維持されていて、この本質に沿って本性が看取される。

10. したがって、場合によってものが異なるとは言え、万物には類比的に、真なる美の共有性が及んでいて、その上に存しているものを通じ、本性は間断なく美しく装われているのである。しかるに何か、この善き連続性の破砕が生じるなら、あるいは逆向きのことが起こるなら、上にあるものが、下にあるものに追隨することになる。その時には質料自身も、本性から見放されて孤独となり、見苦しきのほうが優越することになる(なぜなら質料はそれ自体、形態を逸し構造を欠くものであるから)。そして本性の美は、この質料の非整形性ととも腐敗する。その本性とは、元来知性によって美しく飾られているものであるのに、こうして知性そのものに向け、質料をめぐる醜悪さの継承が、本性を通して生じる。かくして、神の像性は、もはや摸像の特質のうちには看取されなくなる。知性は、言わば背面からの鏡として諸善の像を写すため、善の輝きからその発露を捨象する一方、質料の醜態を自らに受け取ることになるからである。11. このようにして悪の誕生が生ずる。それは美の否定によって附随的に生じるものである。しかるにすべてのものは、原初の善に対して本来的に関わっているなら美である。だがこの前向きに関わり方と類似性から切り離されたものは何であれ、まったくもって美に与るものでなくなる。というわけで、真なる善が、考察の実りとしての論拠に拠れば、一なるものだとしよう。一方知性が、美の像として成立するものであって、自らも美しくあることが可能であるとしよう。だが本性は知性によって維持されているものであり、それは言わば「像の像」ということになる。これらの事どもによれば、われわれの内の質料的部分は、本性によって統御されるときに成立した堅持されるものである。だがその統御者そして維持者から切り離されれば、解体し倒壊して、美に向けての共本性性から引き裂かれる。12. しかるにこのようなことが生じるのは次のような場合に限られる。それは、本性の性向が逆向きのものとなり、欲求が美に向かうのではなく、装飾物に見映えに動かされるケースである。というのも固有の形態において貧した質料に対して、それに同化したものは、その見苦しさと醜悪性に関して、やはり同様のものに変質するのが必定

だからである。

13. だがこのことは、われわれにあっては、眼前の問題に対する考察を通じて提起され、その連関において吟味された。というのも知性の能力は、われわれの内なる部分のどこかにその座を占めているのか、それとも等しく全面的に及んでいるのかということが、探究の課題だったからである。ある定まった部分が知性を包括しているなら、思惟が、本性に反する諸物の上にある皮膜にはうまく届かないという仮説の成立に寄与する。だがわれわれの論拠は次のように実証している。すなわち、人間という複合物のすべての部位の上には、各々が本性的に働きを為すことに応じて、靈魂の力が等しく及んでいるが、もしその部位が本性のうちに留まらなくなれば、靈魂のその力は働かなくなることである。そしてこのことを通じて、連関の上で、推し進めた考察が論述に関わって来た。この考察を通じてわれわれは、次の事柄を学んでいる。すなわち、人間という複合物のうちには、神によって知性が住まっている。一方、神によってわれわれの質料的生命も住まっているが、これはこの質料的生命が本性のうちに留まっている限りのことであって、もしこれが本性から逸れることになれば、知性における働きからもまた異化される。

14. だがわれわれは、そこから脱線した場所に再度立ち戻ることになろう。すなわち知性は、本性的状況から情動ゆえに逸れてはいない諸物に対して、本来の働きを為し、生成物に力を及ぼす一方、自らの働きを受け入れることのできないものに対しては、再度これを無能力化する。別の様々な事柄を通じて、これらをめぐる見解は信憑性を有する。そしてもし、この論述によって疲弊した者たちの聴覚にとって重荷でなければ、それら別の事どもに関しても、われわれに可能な限りで簡潔に記述を行うことにしよう。

第13章 眠り、あくび、夢の原因についての考察。

(PG44, 165A) 1. 質料的にして流動的なこの身体の生命は、常に運動を通して前進していて、決して運動を止めることがないという点のうちに、その存立の力を有している。ちょうどある一本の川が、自らの流れの勢いによって、たまたまそこを運ばれてきた経路の部分を満たして見せることがある。それはその同じ場所のあたりで、同じ水のうちに見られるということではない。そのあるものは下部を流れ、あるものは上部を流れるという具合である。それと同じように、この世の生命における質料的なものもまた、何らかの運動と流れを通じ、逆のものを継続的に受け入れることによって変化を経験し

ている。その結果、決して変化が停止することはない。むしろ不動であることの能力によって、同様のものを通じての運動を常時止むことなく変化するものに留めていると言える。

だがその運動が一旦止むことになれば、必ずや存在にも休止が訪れることであろう。2. 警えを引こう。空虚が充溢を受け入れた場合、逆に言えば充溢が空虚に代わって訪れたということになる。眠りは覚醒の緊張を弛緩させ、しかる後覚醒が、容易に緊張感を有することになる。つまり、これらのうちのどちらも継続的に持続することはなく、むしろ現在のものに代えて交互に双方を容れているのである。同じように本性も、交代しながら自らを刷新している。それは、各々のものの部分において交代を果たしつつ、止むことなく、他のものから他のものへと変改を続けているのである。動物が、その活力に関して変わることなく一定状況にあるということは、その持続している部位の何か破壊と中断を行っているということである。すなわち、身体の持続的な休息は、生起しているもののある種の滑落と解放とを生み出す。しかるに各々のものが適切に時宜を得て、力が本性の継続のために働き、対照物への止むことなき変容が持続される。各々のものにおいては自らを他のものと取り換えて休息させるのである。そのようにして本性は、覚醒によって緊張を高めた身体を受け取りつつ、眠りによって緊張には解放をもたらし、感覚的諸力については、時宜を得てこれを稼働から休息させる。ちょうど競走の後で馬を戦車から外してやるようなものである。

3. しかしながら身体の維持のためには、時宜を得た休息が不可欠である。それは食糧が、妨げなく全身に体内の諸管を通じて注がれるようにし、その途上にあっては決して何か緊張が妨害するようなことがないようにするためである。例を挙げることにしよう。湿った大地から、太陽が十分に暖かい光線を伴って輝きを放つと、何か靄を伴ったような蒸気が引き寄せられる。われわれの住む大地でも、その内側では食糧が、自然が持つ温かさにより、何らか生命への息吹を始めている、さて蒸気は本性的に、上方へ向かい、上にある空気にも似たものに向けて、呼吸を行う。したがって、頭部よりも下にある場所に置かれると、障壁との調和のうちに身を沈める、その様は煙か何かのようである。しかる後、諸感覚の管の方へと蒸散しつつ散乱するが、感覚はこの管のために、必然的に働かなくなる。かの蒸気の通り道によって、感覚が失われるためである。さてまず、視覚はまぶたによって中断される。その様は、言わば何か鉛製の装置によるかのようにであり、それは重みのあるものという意味であるが、こ

の装置が両目のためにまぶたを弛緩させる。一方、聴覚は上述のような蒸気によって狭められる。その様は聴覚の部位に立てられた扉のようであり、聴覚はこうして本性的な働きからの休息を得る。そのような情動に当たるのが眠りであり、身体の中において感覚は平静を保ち、本性的な運動をまったくもって停止する。これは、食物の発散が容易に行われるようにするためである。食物は、各々の管を通じ、蒸気とともに散去するのである。

4. こうして諸感覚器官をめぐる構造が、内側の蒸散のために狭められるとすれば、眠りが何らかの必要性から妨げられよう。筋状のものは蒸気のために一杯となり、自らが自身のために本性的に牽引される。言わば呼吸のために狭められた部位が、拡張によってさらに細くなるような状態である。たとえて言うならば、かなり激しい搾り上げによって、衣類の水分をなくしてしまう人の行為のようである。さらに、のどの周囲の部位は環状になっているが、その中の筋状の部分は多数を極める。そしてこれらの部位からも、濃密化した蒸気が押し出されねばならない場合（環状の部位が直線状に伸びることは、円形の形状に沿って延ばされる以外には不可能だからである）、そのために、あくびにおいて氣息が排出される。それは、顎が下向きに、のどびこに接するまで下がることであるが、その際内側にあるすべてが円形に引き伸ばされ、あの煙状の濃いものが、周囲の部位に拘留されつつ、息吹が出されると共に吐き出されるのである。しかしながらしばしば、眠りの後にこのような現象が生ずるのが見られる。この際、かの蒸気のながしかが送り出されず、吐き出されないままその場に取り残されるためである。

5. このような現象から、人間の知性とは本性に属するものであるということが明瞭に示される。本性が生起し覚醒していれば、知性も協働して運動を行う。だが眠りによって本性が傍らに置かれると、何か夢状の幻覚を、眠りによって働きを為す知性の運動と錯覚することがない限り、知性は運動しないままに留まる。だがわれわれは、唯一理智的で秩序立った思惟の働きだけが、知性に遡るものであるはずだと主張する。眠りの際の幻影にも似たナンセンスは、知性の働きによる一種の幻覚作用であって、靈魂のより非理性的な部分によって、たまたま形作られたものだとわれわれは考える。眠りによって靈魂が感覚から解き放たれると、必然的に、知性の働きの外に置かれるということが起こる。それ故、人間にとって知性の混濁ということが生じる。かくして感覚が停止すると、思惟もまた必然的に墮するのである。その証拠としては、幻影の産物が、しばしば場違いな、またあり得ない事柄に含まれるように思われるという

ことが生ずる。もし靈魂がこの状況下において、推論と思惟によって統御されているならば、そのようなことは生じないであろう。6. しかしながらわたくしに思われることには、諸力の中のより高貴な部分によって靈魂が鎮められる結果(わたくしが言うのは知性と感覚の働きによってということである)、靈魂のうちの滋養的な部分だけが眠りの際に稼働していて、その中では、覚醒時の出来事のある幻影があり、感覚に関わるものの残響、および思惟に拠る働きの残響が生じる。それは靈魂の記憶に関わる部分によってそこに刻印されたものである。これらの事どもが、たまたま描き出されたとおりに、いわば記憶の上での残響となって、靈魂のそのような部分に留まるのである。

7. 人間とは、このような事どものうちに幻想するものである。何らかのつながりにおいて、目に映るものとの対話へと導かれるのではなく、何らか混濁した連関によらぬ迷妄によってさまよう。ちょうど、身体的な働きにより、諸部位のどこかが固有の仕方、そこに本性的に内在している力を通じて働くと、静止していた部位にも何らかの運動が生じるようなものである。これは運動している部位への同化傾向のためである。類比的に靈魂にあっても、そのある部分がたまたま静止し、ある部分が運動している場合、全体が部分に同化する傾向を持つ。というのも、靈魂全体が本性的な一性に反して引き裂かれるという事態は、もし靈魂の諸力のどれかがその一部のみ働きの上で統括しているのであれば、受け入れられまい。

例を挙げることにしよう。知性が、覚醒し尽力している諸部分を統御していて感覚がこれに仕え、身体の統括的能力がこれらから取り残されることがない状態にあるとしよう(つまり知性が、滋養を必要に応じて提供し、感覚は提供されたものを受け取り、身体の滋養的能力は、自らに対して与えられたものを適合させるような場合である)。ちょうどこれと同じように、われわれのうちにあつて諸力の統括は、眠りの際にいわば根本的に変更される。そして非理性的な部分が支配の座に就くと、他の部分の働きが停止するものの、かといって完全に消されてしまうわけではない。その間、眠りによって滋養の力が成熟に向けて急ぎ、すべての本性を自らに向けて用いるが、感覚に関わる力は決してここから引き裂かれるわけではなく(というのも、一度成立したものが分断されることを受け入れることはないためである)、またこの力の働きが、眠りにより、諸感覚器官の怠惰のために固定されて輝きを放つ、ということもあり得ない。まったく同様に、知性も靈魂の感覚的部分によって同化されると、その結果として、知性が運動する際に、この部分も連動して運動し、静止するなら

ばそれに伴って停止することが必定である。

8. 例を引くことにしよう。火災に関して、自然に生じる事柄が想起されよう。すなわち火が初殻に埋もれて四方から埋もれている場合、その炎を風が再発火させることもなければ、くすぶっている火が消されることもなく、もし風が吹くと、炎の代わりに蒸気のようなものが初殻の中を大気に向けて立ち昇り、炎が煙を作り出すことがある。ちょうど同じように知性もまた、眠りによる諸感覚の無運動に覆い隠されて、諸感覚を通じて輝きを放つことも十分でなければ、完全に鎮静化することもなく、いわば煙の如くに運動を行い、一部は働きをなすが、一部はそれができないという状況に陥り得る。

9. またそれはちょうど、ある音楽家が豎琴の弦を弛緩させて、ここに撥を当てたならば、リズムのよい調べを奏することができないようなものである。完全に整えられた状況でなければ、十分な響きを起こすことはできない。むしろ奏者の手が俊敏に術を伴って動き、調べに適った場所に撥を運ぶなら、弦の運動のうちに印なく整わない部分があって、これがブンブンという響きを響かせない限り、鈍い響きは生じないであろう。ちょうど同じように、眠りのために、諸感覚の働きの上での装置が緩んだり、統括者が総じて動きを止めたりすると、たとえその器官が、膨満性や重みからの十分な解放を得られたとしても、あるいは緩慢にまた微かに機能するにしても、感覚器官はその術を正確に受け取ることはできまい。10. そのために、記憶は混乱するし、先見の力は、何かおぼろげな覆いによって眠りに陥りながら、現実に関闘している目標の幻影を通じて幻想し、何かこれから生じうる事柄を、しばしば告げることになるのである。本性の繊細さゆえに、知性には、身体上の分厚さとは逆に、諸存在物のうちの何かを見抜くことができる力がある。けれどもこのような知性の働きには、語られた事柄を明快に解説し、現にある事柄の教えを明瞭かつ明晰なものにすることは、何か直線的な道を通じては不可能である。むしろ、将来起こることの解説は、間接的であいまいなものとならざるを得ず、このような問題に返答する役割の者たちは、これを「謎」と呼んでいる。

11. かくして、ファラオの酒の酌をする人は、杯の中でブドウを压榨する。同じように料理役は、籠を運ぶ状況を想像する(創世 40:1 以下)。これらは現実に各人が労力を割く事柄である。この状況こそ、夢を通じて思いを致す者が置かれているものである。彼らに習慣的なのは、靈魂の先見的能力に刻印された幻影であり、それらは時に応じて、知性のそのような預言的な力を通じ、逸脱した事柄を予告するに及ぶ。

12. もしダニエルやヨセフ、あるいは彼らに続き神的な力を帯びた者たちにあつて、感覚が彼らを全く混乱させることなく、将来の事柄について予め告げられているとするならば、この点はいま議論している論題にまったく関わらない。誰がこのような事どもを、夢の力に考え合わせるだろうか。なぜなら連関の上で、白昼に生じる神顕現についても、これは視界に映る像ではなく、本性のなせる連関が自動的に働いたものと考えられるからだ。というわけで、ちょうどすべての人間が各個人の知性によって統御されているとして、明瞭に神との対話に値するとされる人々はほとんどいない。それと同じように、夢の中の幻影は本性上、一般的にまた一樣に生じるのに対し、より神的な顕現に夢を通じて与ることのできるのは限られた人たちであり、万人ではない。他の人々にはすべて、眠りの際の夢から、すでに述べられたような方法によって、何かに関する予知が可能であるとしよう。13. だがエジプトやアッシリアの僭主が、神から、将来の事どもに関する予知に向けて導かれたとしても、彼らにおける次第は異種のものである。すなわち、聖人たちの智慧は、隠されていたものが明らかになるのであつて、言わば無用でない者は普通に生涯を終えることがないというケースである。ではダニエルの場合、魔術師やマゴイたちが幻視の解き明かしに向けて必死であつたにもかかわらず、どうして彼がそのような人物だということが知られたのであろうか(ダニエル 2)。またヨセフが獄に繋がれていたにもかかわらず、もし夢の解釈のために彼が人々の前に連れ出されることがなかったならば、どうしてエジプトの民が救われることになつただらうか(創世 40)。したがってこれらの事どもは別種のこととし、一般の幻視ではないとして考察せねばなるまい。

14. しかるに夢における像は、万人に共通の現象であり、様々な面でもまた様々な意味において幻視に近いものである。すでに言及したように、靈魂の記憶機能部には、白昼において携わつた務めの残響が残る。喉の乾いた者は泉の傍にいるように思われるし、食糧を必要とする者は饗宴の場にいるような錯覚に陥る。また若者は、自分の年齢が盛りになってくると、それに応じた幻想に襲われることになる。

15. またわたくしは、眠りに伴つて生ずる事柄の別の原因を知っている。それは「錯乱」(フレニティス)に捉えられ、自らの力を超えた食糧のために肥満化し、常軌を逸したある親類を世話していたときのことである。彼は周囲の人々を罵りつつ、自分は内臓が糞でいっぱいになってしまったのだが、それは人々のせいだ、と叫んでいた。そしてすでに、彼の身体は大いに汗をかいて

いたのであるが、彼はその場にいる者たちのことを、自分が寝ている間にびしょ濡れにさせようとして水を用意し、それを自分に飲ませたのだと難じた。彼は叫び、そのように不満を鳴らす理由が明らかになるまで止めなかった。突然、大量の汗が身体から噴き出し、腹がへこんで腸の内容物を明らかにした。病気のために正気の状態が鈍って来ると、本性もまた、身体の病んだ状況と似た状態となって病み、病身のために感覚が働かない一方、病気ゆえの乱心が原因で苦しみの理由を明示す力がなくなって来る。これはおそらく、病弱さのためではなく、本性における眠り故に靈魂の思惟的部分が鎮静化され、そのような状態に陥った者に夢が生じるためであろう。汗の流れは水に、一方食物の過多による不快感は内臓の重さに表されているのであろう。

16. このことは、医術の教育を受けた者たちが多く述べるところであり、病状の多様性に伴って、夢の幻影も多様な形で病める者たちに生じると言われている。胃を病む者と、脳膜を病んだ者として夢の内容が異なり、高熱を発している者と胆嚢を病んだ者、粘液質の者と同じ夢を見るわけではない。多血質の者と消耗性の者として、また夢が異なるということである。これらの事どもから、靈魂における滋養性・成育性の力は、混入を通じて靈魂に散りばめられた知的性質をも幾分有していて、これは身体のある種の状況に何らか比せられるものであり、常道を統御する力もまた、幻覚によって調整されるということを知ることができよう。17. さらに多くの者にあっては、性格のあり方に合わせて、夢が刻印されるということがある。勇敢な者の想像力と、臆病な者の想像力では異なる。放埒な者の夢と、賢慮に富む者の夢とは異なる。気前が良い者と、貪欲な者とは、異なった事どものうちに想像力を働かせる。それは決して思惟のうちで行われるのではなく、靈魂のうちにそのような幻影を刻印する、より非理性的な気質のなせる業である。ある者にとっては、覚醒の心がけによってよき習慣が身につく一方、悪しき夢の像は、夢の中でも形成されるというわけである。

第14章 知性は身体の一部には存しないこと。

その中で、身体と靈魂の運動の判別も行われる。

(PG44, 168A) 1. しかしながら、標題として掲げた課題からわれわれは大いに逸れてしまった。われわれに対してロゴス・論題・御言葉は、次のことを示すよう規定している。すなわち知性が、身体のどこか一部に固定されているのではなく、むしろ身体全般に等しく据えられていて、当該の部位の本性に

相応しい形で運動を起こすということを示すのが課題である。しかるに知性が、本性的な刺激に従うような場合も存するのであって、それは例えば、仕え人となった時のような場合がそうである。しばしば身体の本性は指導的なものであって、苦痛をもたらすものの感覚や、喜ばすものの欲求を内在させるなら、身体の本性は、最初の端緒を提供することになる。それはあるいは、食事への欲求であったり、あるいは完全に快樂に関わる事柄への刺激を産み出したるもする。もしくは知性がそのような刺激を受け入れた場合、固有の賢察によって、望んでいるものへの端緒を、身体に提供したりする。しかるにそのようなことがすべての者に関して起こるわけではなく、むしろ単に奴隸的な状況にある人々にのみ生起する。その人々とは、理性を本性の勢いに奴隸化させ、知性の共闘により、感覚に基づいた快樂に対して奴隸のようにへつらう者たちである。より完成された状態に近い人々にあっては、そのような状況は生じない。というのも知性が導き、情動でなく理性が、有益な事柄を択び取るためである。一方本性は、先行して導く知性の跡に従う。

2. しかるにわれわれの議論は、生命力に関して三つの差違を見出す。それはまず、①感覚を欠いて生育する本性、一方②生育し成長するもののうち、理性的な働きとは関わりを持たない本性、そして③すべての力を通じて理性的にして完全な本性、の三種類である。そしてこれらの本性のうち、知性的な本性がその十全性を有する。これらを通じ、人間という統合体において、三つの靈魂が、個々の輪郭のうちに規定されつつ混淆する。ただ人間の本性とは、いわば数多くの靈魂の混合体だと考えるべきではない。むしろ真にして完全な靈魂とは、その本性において一なるものであり、知的かつ非質料的なものであって、諸感覚を通じて質料的な本性と混じり合ったものなのである。しかるに質料的なものはすべて、転変と変化のうちにあり、もし活かす力を分有したならば、生育を伴って運動を行うであろう。だが生命力ある働きから逸脱してしまったならば、その運動を腐敗に向けて解体させることであろう。3. かくして質料的な実体を欠く感覚もなければ、知性的な力を欠く感覚の働き(エネルギー)が成立することもないのである。

第15章 靈魂は勝義的に、理性的であると同時にそう語られもすること。靈魂は他の名でも同意語的に呼ばれること；その中で、知性の力が各部位に適切に即応し全身に及ぶことも述べられる。

(PG44, 173D) 1. だがもし、創造に際して何らか成育的な働きを有して

いたり、もしくは逆に感覚的な力とは別種のもものが備わっているものがあつたりしたとしよう。その場合、前者が感覚を分有していたり、あるいは逆に後者が知的本性を分有していたりすることはない。それ故に、何か多数の靈魂を想起する者もあるかも知れない。そのような者は、分割の論理によってではなく、靈魂の差違を主張している。なぜなら、諸存在物のうちに看取されるものはすべて、もしまったき仕方存在するのであれば、語られる名でもってまっとうにその名をも呼ばれるであろう。しかるに名づけられたものとは、すべての点でそうされたわけではない。したがってその呼び名に関しても、虚無性を有している。たとえば、もし誰かが真のパンを示したとすれば、われわれは問題なく、この「パン」という名が名前としてこの基体に備わっていると述べる。だが一方、石から技巧的に作り出したもの—その形状は同一、大きさは等しく、表面は類似していて、ほとんどの面において原型と同一のものであるように見えるが、唯一、食料となり得るといふ側面が欠けているもの—を、本性的にパンであるものと対置させる者があつたとしよう。その際われわれは、この石が、正しい用法によってではなく、誤用によって、パンという呼び名を獲得したのだと言うであろう。そして述べられる事柄が、その全面において当てはまるのではなく、呼び名を誤用において有しているようなものはすべて、これと同様の論理に置かれる。

2. かくして靈魂もまた、知性的ならびに理性的なるものの中に、そのまったき姿を有する。したがってそうでないものは全て、靈魂と同名ではあり得ても、決して本当の靈魂ではあり得ず、むしろ生命力をもった何らかのエネルギーであつて、靈魂という呼び名で混用されているものに過ぎない。それ故に、非理性物の本性についても、その本性的な生命を越え出るものではないものとして、各々のものに法を制定した方は、これを人間の使用に同じように委ねたのである。それはいわば、与る者どもにとって、野菜の代わりとして与えられたものである。というのも主は、「あなたがたは、食用の野菜として、すべての肉を食せ」(cf. 創世 9:3) と述べているのであるから。というのもそれなくして成育し成長するものよりも、感覚的機能が少し優っているように思われるからである。肉を好む者たちにとって、これが教えの一助となるように願う。つまり感覚を通じて目に映る事どもに、あまりに想いを働かせすぎないようにし、むしろ靈魂の卓越性にしばし時間を注ぐように望みたい。それは、真の靈魂はこれらのうちに看取されるのであつて、感覚は、理性に与らないものどもにあつても、等しい働きを為しているからである。

3. だがわれわれの論述の連関は、別の方向へと導く。というのもわれわれの考察の対象とは、人間のうちに考えられることどものなかで、知性による働きが、存立の質料性に比してより高貴だということではなく、むしろわれわれのうちのどこかの部位にはなく、すべての部分に、すべてを通じて等しく知性が含まれているという点だからである。知性は何か外界から取り囲んでいるものでも、内にあって支配されているものでもない。これらは、器ないし互いにはめ込まれた他の物体の上にあるという言い方が正しい。しかるに知性の、身体的なものへの共同体性は、いわゆる言い難くまた想定しがたい形でつながりを有している。内在するのでもなければ(というのも非物体的なものが身体のうちに支配されることはないためである)、外側を囲んでいるのでもない(というのも非物体的なものが何かを取り囲むことはないためである)。むしろある種の不思議かつ考えつかないような仕方、知性が本性に近づいているのである。つまり付着もし、本性のうちにまた本性をめぐって看取もされ、そのうちに坐すのでもなければ包含されるのでもなく、ただ本性そのものに固有の脈絡において連絡され、知性が働きの為し手となる、と言う以外に表現も思いつきもできないような仕方による。そしてもし本性をめぐって何か過誤が生じたならば、運動はそのために思惟においても停止してしまうのである。

第16章 「人間をわれわれの像として、また似姿として創ろう」(創世1:26-27)と述べる神の言葉についての観想；その中で、「像」の意味とは何であるのか、情動に服し死を被るものが、至福にして無情動の存在になぞらえられるのかどうか、また原型には存在しなかった男性・女性の別が、なぜ像には存するのか問われる。

(PG44, 177D) 1. けれどもわれわれは再び、「われわれはわれわれの像としてまた似姿として、人間を創ろう」(創世1:26)という神の言葉を取り上げることにしよう。教会の外のある人々は、人間の偉大さに対して何と些細なことまた不当なことを妄想していることだろうか。彼らは、人間とは小さな宇宙であると述べ、万物を構成しているのと同じ諸要素から成立していると考えているのである。彼らは、単なる名前の響きから、人間の本性に対してそのような讃辞を与えている。彼らは自分たちも気づかぬままに、プロトとネズミに関する特徴をもって人間を称揚しているのである。というのもそれらもまた、四要素の混合物なのであるから。総じて、諸生物の各々に関しては、多かれ少なかれ、魂的なるものをめぐる分有性というものが看取される。感覚に与って

るものは、魂性なくしては、まったく本性を有し得ない。では、人間が宇宙の写しであり類似物であると考えられるべきだというのは、どれほど偉大な事柄であることか。天は過ぎ去り、大地は変転し、そのうちにあつて統括されているものはすべて、周囲を取り巻くものの変転とともに過ぎ去るではないか。

2. だが教会の教えに従うなら、人間性の偉大さとは、何のうちに存するのであろうか。それは被造物たる宇宙への類似性のうちにではなく、創造主の本性の像として成ったという点にあるのではないだろうか。3. では「像」という語の意味は何であろうか。おそらくあなたは問うだろう。どうして非物質的な存在が身体に似せられるのだろうか。どうして束の間の存在が永遠なるものに比せられるのだろうか。変化によって様変わりするものが、変化しないものになぞらえられるのだろうか。情動のうちにあり腐敗する者が、無情動にして不腐敗性のものに比せられるのだろうか。常に悪と共棲し、悪とともに育まれるものが、まったく悪の混淆しない存在に比せられるのだろうか。つまり、範型として想起されるものと、像として成ったものとの中間には、大きな隔りがあるのである。しかるに像とは、原型への類似性を有しているならば、まったくもってそう名づけられるのが正当である。しかしながら、原型の模倣ということが取り去られるなら、そのようなものは別の何ものかであつて、かの原型の似像ではなくなる。

4. 一体全体、人間というこの死すべき情動を被る短命のものが、混じりけなく淨らかで、常なる本性の似像だということはどうしてあり得るのだろうか。もっとも、この件に関する真なる説は、ただ真に真理である方だけが明瞭に知悉しているのであろう。そこでわれわれは、われわれに可能な限りにおいて、半ば推測をそして仮説を用いながら、真理の跡を辿ってみることにしたい。われわれはいま課題としている事柄に関して、次の事どもを前提としている。

神の御言葉は決して虚偽を語ることがない。御言葉は「人間は、神の像として成った」と述べている。次に、人間本性の憐れむべき窮状は、情動を被らぬ生命の至福性になぞらえられている。なぜなら次の二つの点のうち、そのどちらかが同意されることが不可欠である。すなわち、まず人間性について、神に沿って判断する場合、神性のほうが情動を被るのか、あるいは人間性のほうが無受動なのか。すなわちこれは、「類似性」という語彙が、双方の側から同じ言葉で理解されるためである。だがその一方で、神性は無情動であり、われわれは情動の外にいるわけではないという可能性があり得る。その場合、ロゴス

に沿って神の声が真実を語っているとわれわれが述べた論述に、別の面が隠されているということになるのだろうか。そのロゴス・御言葉とは、人間が神の像のうちに成った、と述べているものなのだが。

5. かくしてわれわれは、神的な聖書に関して、記されたテキストが、探究している事柄への善き導き手となり得るのかどうかについて、検討する必要がある。聖書は「われわれは人間を像として創ろう」と言う際に、何に向けて作ろうというのかを述べ、さらに付言して「神は人間を創った」と言い、「神の像として人間を創った」と述べた後で、「神は彼らを男と女に創った」と述べているのである。この点に関してすでに述べたことであるが、異端的な不敬が生じる可能性を取り除いておくために、そのような付加句が加えられたと考えられる。それはひとり子たる神が、人間を、神の像として創ったということ、われわれはいかなる論拠においても、父と子の神性を峻別すべきではないこと、聖なる書もまったく同様に、神を次の二様に名づけているということの故である。つまり、神とは人間を創った方である、ということと、神とは、人間がその方の像として成った、その方であるということである。

6. だがこれらの事どもに関する議論はひとまず措くとしよう。むしろ今取り掛かっている課題に探究を向けるべきであろう。神性は至福であり、人間性は憐れむべきであるのに、聖書においては、どうして人間性が神性に似たものであると呼ばれているのであろうか。7. というわけで、聖書の字句を正確に吟味する必要がある。われわれは、一方では人間は「像として成った」と言われているのに対して、他方で現在では惨状のうちに置かれている。こう言われている。「神は人間を創った。神の像として人間を創った」。ここには、像として成る者の創造のうちに目的がある。その後構文の上で、御言葉に附加がなされる。御言葉は述べる。「神は彼らを、男と女に創った」。わたくしは、どんな人にてあれ、このことが最初の範型のうちに考えられてはいない、ということが明らかだと思う。なぜなら使徒がこう言っているからである。「キリスト・イエスにあっては、男も女もない」(ガラテヤ3:28)。だが御言葉は、人間がこれらの性差に分かたれていると述べているのである。

8. そこで、われわれの本性の創造は、言わば二段階であったということになるだろう。すなわち神性に向けて似せられた創造と、男と女という差違に向けて分かたれた創造の二種である。というのも御言葉は、記されたテキストの構文から、およそ次のようなことを暗示しているからである。すなわちまず「神は人間を創った。神の像として人間を創った」と言い、その後再度、すで

に述べた言葉に付け加えてこう言っている。「神は彼らを、男と女に創った」と。したがって男女の性差というものは、神に関して考えられる事柄とは異質なもののなのである。

9. わたくしが思うに、これは何か偉大かつ崇高な教義が、語られた言葉を通じて神の書によって伝えられているのである。その教義とは次のようなものである。その究極において、互いに隔たった二つのものがある。その中間に人間性があり、一方は神的にして非物体的な本性に属し、もう一方は理性に与からない獣的な生命に属す。語られた二箇所各々に関して、人間という混合物のうち、その痕跡を看取することができる。まず理性的で知性的な特質は、神的な面に属し、男性と女性に関わる差違に関わっては来ない。一方、身体的な構造や作りは、理性に関与しない差違に属し、男性と女性とに分かれるものである。これらの各々は、まったくもって、人間という種の生命に関わることのすべてに含まれる。だが、人間の誕生を順序立てて説明するくだりからわれわれが学んでいるように、知性に関わることを述べるくだりが先行し、理性に与からない獣との共通性や同起源性が人間に見られるというくだりは、後から附随的に加えられたものである。なぜなら御言葉は、最初にまず「神は人間を神の像として創造した」と言って、使徒が述べている通り、この記述により、そのような存在である人間には男性性と女性性が存しないことを示しているためである。しかる後、人間の本性に固有の特質を付け加え、「神は彼らを、男性と女性に創造した」と述べているわけである。10. わたくしは現在の課題に対してこのような説を提示するが、そのようなわたくしに憤慨することは、誰にあってもしないでいただきたい。

神は自身の本性において、およそ捉えられ得る限りの善のすべてである。あるいはむしろ、考えられ捉えられる限りのすべての善を超えた存在である。この方は、人間の生命を創造するに際して、善であるということ以外の何事にもよらなかった。神はこのような方であるから、それ故にこそ、人間本性の創造に勤しむ際には、その善性の力を、一部は現に神の持つものから与えつつも、一部は人間がそれに与ることを妬みつつ、といった中途半端な形で提示することはなかったはずである。むしろ善性の完全な形相は、人間を非存在から誕生へと導き、諸々の善に欠ける点がないように創り上げたという点のうちに存する。さて、諸々の善の各々についてのカタログは、長大なものとなるが、それを数において捉え出すことは容易でない。それ故御言葉は、包摂的な表現によってすべてを概括し表現した。それは、人間が神の像として成った、という

表現においてである。すなわちこれは、神が人間の本性を、あらゆる善に与るものに作り上げた、と言うのと同じことなのである。というのももし、神性が善の充溢であるとすれば、人間性とはその充溢の像である。したがって、すべての善が充溢しているという点において、この像は原型に向けての類似性を有している。

11. したがってわれわれのうちには、あらゆる美のアイデア、すべての徳と智慧、より優れたものに関連づけて考えられ得るものすべてが備わっているのである。しかるにすべての中で必然的に唯一の事柄とは、自由であるということ、すなわちいかなる自然の支配にもくびきで繋がれることがないという点であり、良いと思われる点に関して判断するに自由であるという点である。徳とは、支配されることのない、意志による財産なのであって、強いられ強制された徳というものはあり得ない。

12. というわけで、像はすべてにおいて原型の美の特徴を担っている。もしいかなる点でも相違点を有していないならば、もはや類似物ということではできず、むしろすべてにおいて区別できないことから、すべてにおいて原型そのものであるということが立証されるだろう。では一体、われわれは神性そのものと、神性に類似するとされたものとの相違点を、どのような形で看取すればよいのだろうか。まず、前者は非被造物であるのに対して、後者は創造行為によって成立したものである、という点においてであろう。一方、そのような特質の差違が、さらに他の特質の連関を形成する。つまり前者の非創造的本性は、不変的であり常に同一のものであるのに対し、後者の被造的本性は、変化なくしては成立が不可能であるということに関して、まったくもって同意がなされるであろう。というのも、非存在から存在への移行は一種の運動であり、また非存在から存在への変化も同様であって、この変化は神の意向によって生じたものである。

13. 福音書は、銅貨の上に刻まれた像をカエサルの似像であると言っている。これを通じてわれわれは、カエサルに似せて作られたものうちには、外見上の類似性はあるが、その実体（ヒュポケイメノン）においては相違を有するという事を知る。それと同じように現在の議論にあっても、われわれは刻像の代わりに、神の本性と人間の本性（これらのうちに類似性が存する）に関して観想される属性を知覚するが、その実体のうちに相違性を見出す。その相違性は、非被造性と被造性のうちに看取される。14. こうして、前者は常に同一の状態にあり、後者は創造によって成ったもので、変化により存在を始

め、そのような変化に対して同起源性を有するということになる。それゆえ預言が述べているように（ダニエル補遺スザンナ 42）、万物をその誕生以前から知悉している方は、その先見の力に随い、否むしろ、人間の自由意志の独立性と自律性によりその運動が何に向かう傾向にあるのかを予め考えた上で、起こるはずの事柄を知悉しつつ、男性と女性に関する差違を像のうちに織り込むという工夫をした。そのような差違はもはや、神的な原型に向くものではなく、すでに述べたように、理性に関与しない本性に関わるものである。15. そのような工夫をした理由は、真理の証人たち、そして御言葉の奉仕者たちだけが知っていることであろう。それに対してわれわれは、可能な限りにおいて、ある種の推測と模倣を通じて真理を想像し、知性に届く事柄を、陳述のかたちで提示するのではなく、良識ある読者の方々に対し、鍛錬の形式のうちに伝えることにしたいと思う。

16. では、この問題に関して、われわれが考察してきた事柄とは一体何であろうか。御言葉は、「神は人間を創造した」と述べており、意味上の無限定性によって人間性のすべてを表現している。ここでの被造物（人間）は、以降のくだりで物語が語っている「アダム」と同一の名ではない。むしろ、創造された人間の名は、誰それというのではなく、普遍的なものなのである。したがって本性のこの普遍的な呼称により、われわれはおよそ次のようなことを推測するよう導かれる。それは、神的な先慮と力によって、すべての人間性が、第一の創造行為のうちに包摂されているということである。神によって成った事物のうちで、神によって規定されていないものはないと考えるべきである。むしろ諸存在の各々には、ある種の限界（ペラス）と広がりがあり、これが創造主の智慧によって測り取られていると考えたい。

17. ある一人の人間は、身体に関して自らの寸法に包み込まれていて、彼の広がりや存立（ヒュポスタシス）の大きさであり、これが身体の外貌に見合ったものとなっている。ちょうどこれと同じように、わたくしには、さながら一つの身体のうち、人間性の充溢全体が、万物の神からその先慮の力によって包括されていて、このことを御言葉は「神は人間を創造した。神の像として人間を創造した」と述べて教えようとしているように思われる。像は、本性のある一部分のうちに見出されるのではなく、恵みが、人間をめぐって認められる事物のどこかに存するのでもない。むしろそのような力は、人間という種族全体に等しく及んでいる。その徴とは、すべての人々に同じように知性が備わっているということである。すべての人々が、思惟を働かせたり、前もっ

て熟慮したりする能力を有している。また神的な本性が、その本性に従って成ったもの(すなわち人間)のうちに像を形作る、その他すべての点についても同様である。原初における世界の創造に際して、原初と同時に現わされた人間と、万物の終焉に際して成るであろう人間とは、同じように等しく自らの上に神的な像性を帯びている。18. それ故すべてが一なる「人間」という名で呼ばれているのである。神の力にあっては、何も過ぎ去ったということがなく、また何も起こるべきであるということがない。これから予期せられることも等しく、万物を包摂するエネルゲイアによって、現在のうちに統括されている。したがって、最初の人々から最後の人々に至るまで伸びている本性は、「存在者」(出エジプト 3:14)の言わば一なる似像なのである。男性と女性への種の差違は、思うに、以上のような理由により、創造の最後に加えて設けられたものなのであろう。

第17章 子孫を儲けることは墮罪の後なのかどうか、靈魂はいかにして成立したのか、原初的人类は罪を犯さぬままであったのかどうか、といぶかしむ者たちに対して、何を答えるべきであるか。

(PG44, 188A) 1. さて、課題を吟味する前に、われわれに敵対する者どもから提起されている問題の解決を試みることのほうが、おそらく重要であろう。というのも彼らは、墮罪より前には出産も、陣痛も、子供を儲けることに對する衝動も語られていないと主張する。墮罪の後、人祖は樂園から追放され、女は陣痛という処罰に定められたが、それと同時にアダムは同じ軀の女を婚姻によって知るに至り、この時に子供を儲けることの端緒が生起した。したがって、もし婚姻も、陣痛も、子供を儲けることも、樂園においては存しないとすれば、連関により次のように考えることが必然的である、と彼らは主張する。すなわち、もし不死性の恩寵が死すべき存在に授けられることがなかったならば、人間の靈魂は多数に及ぶことはなかったであろう、とする。そして婚姻は、消失してゆく者たちの代わりに、彼らから生まれる者たちを導き入れ、次の世代の者たちを通じて本性を維持することができる。かくして人間の生命に入り込んだ過ちは、ある仕方では有益なものとなったと言える。もし死をめぐる恐怖が、連続性に向けて本性を突き動かすことがなかったならば、人間という種は、人祖である二人の内だけに留まっていたであろう、とするのである。

2. だが、およそ真なる言説が存在するとすれば、パウロによる「樂園の語られざるべき事柄」(2コリント 12:4)について、これを秘儀のうちに伝授さ

れた人々だけにそれは明らかなのかも知れない。これに対し、われわれの説は次のようなものである。すなわち、復活をめぐる論議に際してサドカイ派の人々は、反駁の際に、7人の兄弟たちに嫁した多婚の女性の例を、自分たちの教説を補強するために持ち出した。そして、復活の後、彼女は誰の妻ということになるのかと尋ねられて、主はこの問いに対して答えたが、これはサドカイ派を教育するのみならず、その後続く者たちすべてに、復活における生命の神秘を明らかにするものであった。主は述べる。「復活にあっては、娶うことも嫁ぐこともない」(マタイ 22:30)。というのもう死ぬことはあり得ないからである。つまり彼らは天使の如くになり、復活の子らとなって神の子らなのだ、ということである。しかるに、復活の恵みとはわれわれに、罪に陥った者たちの原初の状態への還帰(アポカタスタシス)として告げられているものに他ならない。なぜなら予期される恵みは、最初の生に向けて一種の登攀が起こることであって、この恵みとは、楽園から追放された者を再び楽園へと引き戻すものである。かくして、もし原初へと戻される者たちの生が、天使たちの生と本質的に等しいのであれば、墮罪以前の生が、いわば天使的なものであったということは明白である。それ故、われわれの生の原初への登攀もまた、天使たちになぞらえられるものである。だが述べられているように、天使たちの許では婚姻は存しないにも関わらず、天使たちの軍勢は無限なる多数に及ぶ。というのかのダニエルが幻視の中で、そのように述べているからである(ダニエル 7:10)。かくして同様に、もしわれわれの過ちに伴い、天使との同尊厳性からの逸脱や転落が生じなかったとすれば、われわれにあっては、種の増大のための婚姻は必要ではなかったはずである。むしろ、天使たちの本性における多数化のあり方がいかなるものであるかに関しては、人間による推測には語られ得ずまた思い描くこともできないものであって、それらとはまったく異なったものであろう。使徒は、人間が天使たちよりも少しばかり劣ったものとされたということを明らかにしているが(ヘブライ 2:7)、彼は創造者の意向によって定義されたものへと、人間の分を増し高めている。

3. だが、人間の誕生の在り方を追究して偏狭な議論を展開する者があったとしよう。そして人間に、婚姻による共働がもはやこれ以上必要とされないのだとすれば、われわれもまた、天使的な存立のあり方について問い返してみたい。彼ら天使たちは、いかにして無限の多数性のうちにあり、その実体は一でありながら、多性のうちに数えられるのであろうか、と。そこで「人間は婚姻なくしてどうして存在し得よう？」という問いを提起する者に対し、次のよ

うに応答するのが適切であろう。われわれは答える。「天使たちが婚姻なくして存在し得るように」と。というのも墮罪以前には、人間は天使に似たものであった、ということに関しては、その状態への再度の還帰が明らかにするところだからである。

4. かくしてわれわれにより、これらの事どもが十分に検討されたのであるから、ひとつ前の論題に立ち戻ることになろう。像の形成の後、どうして神は男性と女性という差違性を、この被造物に賦与したのであるか。というのも、この問題に関しては、われわれにより、先に終えられた考察が有益であるように思われる。というのも万物を存在に向けて導出し、人間の全体を自らの意向のうちに、神の像として形作った方は、後に生まれ来る者たちを少しばかり付け加えることで、靈魂の数が固有の充溢へと完成されるのを見るために待とうとはしなかった。むしろその充溢そのものによって瞬時に、人間の本性のすべてを先慮の働きを通じて考え抜き、崇高にして天使にも等しき場所において人間を尊んだのである。これは神が、未来を見る力によって、人間の自由意志が、善へと真っ直ぐに進みゆくことをせず、それ故に天使的な生からは墜落するという先見していたためである。人間の靈魂が、天使がその多さに増大したときのようなあり方から逸脱し、その数が減少してしまうことのないように考えたのである。そのため、罪に陥った人々と同じ分だけ、増大への志向を人間本性のうちに備え、天使的な崇高さの代わりに、獸的で非理性的な性質を、相互に連続するありかたで、人間性のうちに埋め込んだわけである。

5. この点でわたくしには、かの偉大なるダビデもまた、人間の悲惨さに憐れみをかけるが故に、次のような言葉で人間本性を嘆いているように思われる。「栄華のうちにあるならば、人間が悟りを得ることはない」(詩編 49:21)。ここで「栄華」と彼が呼んでいるのは、天使たちとの同尊厳性のことであろう。それ故に彼は、「その人間は知性を持たない畜獣にも等しく、それらになぞらえられる」と言っているのである。かの流れゆく誕生を本性に受け取った者は、質料的な傾向のために、紛れもなく獸的となったからである。

第 18 章 われわれに存する非理性的な情動は、
非理性的な本性との同起源性に端緒を有すること。

(PG44, 192A) 1. わたくしは、個々の者に存する諸々の情動もまた、この同じ端緒に発するものであって、言わば何か泉のような場所から、人間の生命に溢れ出るべく賦与されたのだと考えている。ロゴスにおけるその証拠は、

諸情動の同起源性であって、それはわれわれと理性を持たない動物たちとに等しく認められるものである。人間の本性、神的なアイデアに沿って形作られたものにとっては、情動のうちなる感情を原初の端緒から証言づけることは、許されないものとすべきだからである。しかし、非理性的なものの生命がこの世界に進み出たため、人間もまた『創世記』によれば、彼処に発する本性のいくばくかを、上述のような原因の故に有している。そのために人間は、かの本性のうちに看取されるそれ以外の事どもにも併せ与かっている。神に対する似姿性というものは、人間の憤怒によることではない。また人間において卓越した本性が特徴づけられるのは、快楽によるのでもない。臆病や倨傲、より多いものへの希求、小さくなることへの憎悪、この類の事柄はすべて、神に相応しき特徴の彼方にあるものである。2. したがって人間の本性は、これらの属性を、かの非理性的な部分から自らへと引き寄せたということになる。というのも非理性的な生命は、自らの維持のため、それらの動物によって保持されているのであり、これら非理性性は人間の生へと移し入れられて情動と化したのである。生肉を食らう性質は、憤怒によって維持される。一方、快楽を好む性質は、生物の増殖を確保する。臆病は弱さを、恐怖はより力ある者に捕えられやすいことを、そして飽食は肥満を食い止める。そして何であれ、快楽に関わる事どもにおいて過ちを犯すことは、理性に与っていない動物たちにおける苦しみの前提である。これらすべて、またこの種の事柄は、獣的な誕生を通じて人間の形成の内に入り込んだものである。

3. さらにわたくしをして、一種の制作術的な造形操作により、人間という似像を言葉によって記述することを認めていただきたい。たとえば、前後両面が顔の彫刻模型を見ることがあったとしよう。これは、この種の技術に長けた人々が、通り過ぎる人々を驚かせるために作り上げるものだが、一つの頭に二つの顔面の姿を彫り込んだものである。ちょうどそれと同じように、わたくしには、人間は、正反対の面に向かう類似性を担っているように思われる。まず思惟のもつ神にも似た特性により、人間は神的な美に向けて形作られている一方、情動ゆえに生ずる衝動のために、獣性への親近性を帯びている。しかしながら理性すら、しばしば非理性性に向かう傾向と性質のゆえに獣的なものと化し得る。すなわち、より優れた特徴を、より劣った特徴でもって覆い隠すのである。もしある人が、これらの性質に向けて思惟的な働きを引き下ろし、思考を強いて情動に奉仕するものとしたならば、善き特徴には何か非理性的な似像への一種の変転が生じ、これに向けて本性はすべて、完全に作り変えられてし

まう。それはちょうど、理性が諸情動の端緒を耕すことになり、しばらくすると情動が成長して多数化するようなものである。つまり、思考が協働性を自ら情動に適用することにより、場違いな事どもの誕生を増殖させ豊かにしてしまうようなものである。4. まったく同様に、快楽を好む心は、理性に与らない動物との類似性から端緒を得ているが、人間的な罪のうちに増長し、快楽のために過ちを犯す者どもの中にも、思考に与らない生物のうちに見出すことのできないような多様性を産み出すに至った。かくして憤怒を起こすことは、動物たちの衝動と同起源的であるが、理性の協働によって増し高まる。そしてここから、怒り、妬み、虚偽、陰謀、偽善が生まれるのである。これらの事どもはみな、知性の悪しき耕し方のなせる業である。というのももし情動が、思考の共闘から引きはがされるなら、憤怒はいわばはかなく、弛緩したまま放置され、直ちにいわば泡と化して、すぐに消滅するであろう。ちょうどそれと同じように、豚どもの飽食は倨傲をもたらし、馬の高慢は傲慢の端緒となる。そしてこれらはすべて、一つ一つ、獸的な非理性性から形作られてきたものであり、知性の悪しき使用を通じて悪と化してきた。5. そしてまったく同様に逆の面でも、もし思考がそのような運動の力を取り込むならば、これらの各々は徳の一種へと変容することであろう。憤怒は勇気を形作り、臆病は安全を産み出し、恐怖は従順を、憎悪は悪からの離反を生むだろうからである。これに対して愛の力は、真なる美への欲求を産み出す。しかるに高貴さとは、諸情念の習慣を越え出るものであるため、思慮を悪によっては隷属させられない状態に守り抜く。かの偉大なる使徒もまた、この種の高め方を称揚していて、彼は止むことなく上にあるものを想うように命じている(コロサイ3:1)。かくして、この類の運動はすべて、思惟の崇高性ととも高められるのであって、神的な像に基づく美によって形作られているのだということを見出すことができるだろう。

6. しかしながら、罪の持つ傾向は鈍重で下向きであるため、まったく異なった事態が生じる。というのも、理性に与らない本性の重さとともに、靈魂の棟梁的部分は引きずりおろされてしまう。重く土質的な部分が、思惟の高まりによって高められるのと同様である。したがって、われわれの悲惨さは、神的な賜物をしばしば知られざるままにする。さながら像の持つ美しさに対し、肉の有する情動が、醜いお面となって上から覆っているといったありかたである。7. というわけで、このような状況に目を向ける者たちは、ある意味で正しく認識する者たちであり、したがって、神的な姿がそれらの内に存するとい

うことについても、安易にでなく推察することであろう。もっとも生を正した者たちを通じて、人間の内に神的な像を見ることが可能である。というのももし誰か、情動にまみれ肉的な状況に陥った者が、人間が神的な美によって飾られているということを信じられないことにしたと仮定しよう。だが総じて徳において崇高であり、穢れから浄められた者が、あなたのために、人間がより優れたものに向かう存在だという憶測を確かなものとするのであろう。8. 論拠を、事例において示した方が分かりやすいであろう。邪悪さにおいて著名であった者、たとえばアイコンヤ（コンヤ；エレミヤ22:24）、あるいは他にも邪悪さの故に想い起される者は、悪性のシミをもって本性の美を拭い去ってしまった。だがモーセや彼に続く者たちにあっては、像の姿が浄らかなままに守られた。かくして、彼らにおいて美が陰りを帯びていないとすれば、彼らの内にこそ「人間は神の像となった」と語られることへの信が明白となる。

9. けれども、ひょっとしてある人は次のことに羞恥を覚えるかもしれない。すなわちわれわれにあっては、食すことにより、理性に与らない動物もとの類似性のもとに、生命が維持されているのだから、この理由により、人間が神の像として創造されたというのは相応しからざることだと思われる、と。けれどもこのような務めの免除が、いつか本性に与えられるであろう、と期待されたい。というも使徒が述べているように、神の王国は食べたり飲んだりすることにあるのではないのだから（ローマ14:17）。主が明言しているように、「人間はパンのみで生きるものではなく、神の口を通じて発せられるすべての言葉のうちに生きる」（マタイ4:4）。そればかりでなく、復活はわれわれに、天使たちにも等しい生を示している。食べることは天使たちの許では存せず、人間がそのような務めから解放されるであろう、という信だけで十分なのである。人間が、天使たちとの類似性のうちに生きるために、

第19章 「望みの善の享受は、やはり食したり飲んだりすることのうちにある；なぜなら原初、楽園において、人間は望みの善によって生きていたのであるから」と述べる者たちに対して。

(PG44, 196C) 1. だがおそらく、人間は再び同じ生命の形に戻ることはないだろうという人があるかも知れない。つまり、以前には食したりしたものの、その後はそのような務めからは解放されるだろうと考えるのである。しかしながらわたくしが聖なる書に耳傾けてみると、身体上の食事や肉を通じた喜びが語られているのがわかったばかりでなく、何か別種の食物が、肉体に関わ

る一種の類推(アナログア)によって述べられているのが判明する。すなわちその食物の享受は、純然たる靈魂に及ぶのである。例えば智慧は飢える者たちに対し、「あなた方はわがパンから食せ」(知恵16:20; cf. マタイ26:26, ヨハネ6:51)と命ずる。また主はそのような食物に飢える者たちを祝福する(マタイ5:6)。さらに主は「もし渴いている者があれば、わたしの許に来て飲むがよい」(ヨハネ7:37)と述べる。さらには偉大なイザヤもまた、「喜びを飲め」(イザヤ25:6)と、彼の高貴さに耳を傾けることのできる者たちに命ずる。一方、処罰に値する者に対しては、預言者的な威嚇もある。たとえば「飢餓に懲らしめられるであろう」(アモス8:11)といったような場合がそうである。ここで飢餓とはパンや水の欠乏ということではなく、むしろ御言葉の欠如ということである。なぜなら聖書が述べているのは、パンの飢えや水の渴きといったことではなく、むしろ主の御言葉を聞くことに関する飢餓ということだからである。2. というわけで、エデンにおける神の植物(エデンとはここで放縱との意だと解される)に関しては、何か果実を考え併せるようなことも、人間がこの実りを通じて育まれるということに疑念をはさまないといったことも適切ではない。そして決して、楽園における生活様式に関して、この食料が束の間の、もしくは流出するような性質を有するものだと考えるべきではない。主は述べる。「楽園にあるあらゆる木から取って食せ」(創世2:16)。3. 健全な仕方で飢える者に対して、楽園に存し、あらゆる善を包摂しているこの樹木、その名が「万物」であるような木を与える者が誰かあるだろうか。この樹木とは、御言葉が、それへの与りを人間に恵みとして授けているようなものなのである。というのも諸々の善のすべてのアイデアは、創造者にして上に位置するロゴスと、自らに照らして本性を共にする。つまり全体が一なるものなのである。誰がわたくしを、この木の多様にして二重性を持つ享受から引き離し得ようか。眼識の鋭い人々にとっては、その果実が生命であるようなかの「万物」とは何であるのか、さらにはまた、その結末が死であるところの、かの多様なものとは何であるのかについて、まったく明らかだろうからである。というのも万物に対する享受を惜しみなく提示する方が、人間に対して共通する事物への与りを阻むとすれば、それは必ずや、何らかの理由と先見のゆえであろうはずだからである。

4. 実際わたくしには、かの偉大なるダビデ、賢者たるソロモンという二人の師が、かの御言葉の解釈を正しく受け取っているように思われる。というのもこの両者とも、認められている放縱の恵みとは一つであると考えている。そ

れは真なる善それ自体であり、これこそ実に、あらゆる善なのである。まずダビデは次のように述べている。「主を味わえ」(詩編 37:4)。一方ソロモンは、かの知恵そのもの、それは主のことなのであるが、その智慧=主を「生命の木」(箴言 3:18)と呼んでいる。

5. かくしてすべての木と生命の木とは、同一のものだということになる。すべての木から取って食すことを、御言葉は神によって創造された者に許可している。しかるにこの木ともう一本の木とは区別される。もう一本の木から食すものとは、善と悪に関する知識のことである。これは、反対の意味を持つものを固有の仕方では対置させるものであり、部分的にその実りを実らせるものではない。むしろ言わば、混合し交じり合った実りを、逆の性質を織り交ぜたかたちで花咲かせるものである。生命の創始者は、この樹木から取って食すことを禁じる一方で、蛇が勧めの誘惑をなし、死に対して侵入の端緒を設けた。そして併せて勧告を為した女性も、説得力を持つように思われた。こちらも美しい色彩と快楽をもってこの果実を彩り、享受に向けて欲望を高まらせるようにしたのである。

第 20 章 楽園における生とはいかなるものであったのか、 そして「禁断の樹木」とは何であるのか。

(PG44, 197C) 1. だが、善と悪の混在した知識を秘め、感覚の快のうちに花開くものとは、いったい何であろうか。われわれは「知りうる」(創世 2:9) という語の意味を観想の端緒に用いるなら、真理から遠く逸れた考察をすることはあるまい。わたしが思うに、この点に関して聖書では、覚知(グノーシス)とは知識ではなく、むしろある種の聖書上の慣例の相違が、覚知と識別という表現になっているように思う。つまりまず、悪から善を知でもって識別することは、かなり完全な習慣のなせる業である、と使徒は述べている(ヘブライ 5:14)。つまり、これは鍛錬された感覚のなせる業なのである。それゆえ使徒は、万物をよく吟味すべきであるとの規定を設け、識別する行為は霊的な人物に固有の事柄である、と述べている(1 コリント 2:15)。一方覚知とは、その意味するところからして、すべての箇所において知識や知慮と同一だと解釈されるわけではなく、むしろこれは、恩寵に属する心的境位である。たとえば「主は自らに属する者たちを知っている」(2 テモテ 2:19)と言われ、また主はモーセに対し「わたしはあなたをすべてにおいて知っている」と述べる(出エジプト 33:17)。一方、万事に通じている主は、悪の内に定められた者どもに

関して、「わたしはお前たちを知らない」(マタイ7:23)と述べる。

2. したがって、そこから善悪両者の混じった知が実りとして得られる樹木は、禁じられたもののうちに属することになる。かの実りには、正反対のものも混じっており、自らの弁護者としての蛇をも含む。おそらく、悪がそれ自体で固有の本性的の下に姿を現すとき、裸の姿でないのは、この理由によるものであろう。というのももし悪が、迷える者を自らに対する欲求へと引き寄せる善とは決して交わらないのであれば、悪徳とは実行されることのないものであろう。しかるに悪の本性的とは言わば混合的なものであって、その深みにおいては、いわば何か隠れた奸計のような形で破滅を秘めている。一方その表面の欺きにおいては、ある種の美の幻影を示している。お金好きの者たちにとっては、その質料の表面の美しさは美に思える。だがお金好きは、あらゆる悪の根となる(1テモテ6:10)。誰か、放蕩の罠に懸かって情動の域にまで引きずり込まれる者が、その快樂を何か美しく選択すべきものだと思うことがなければ、放蕩の悪臭を放つ泥へとどうして滑落するだろうか。同様に、他の過ちを取ってみても、それらは内部に隠れた腐敗を秘めているのであって、一見すると選択すべきだと思えるが、ある種の欺瞞でもって、不注意な者どもには善の代わりに追求されることになる。

3. かくして、多くの者たちは感覚を喜ばせる事柄のうちに美を認めるため、真の美と見せかけの美とは一種の同名異義語と化している。それ故、悪に対して言わば善に対するような欲求が生じる。これは聖書によって美と悪との知識と名づけられているものであり、知識とは、言わば状況と混淆とを説明するものなのである。美に添えて花開くものであるから完全な悪とは言えず、また悪が潜んでいるため、まったく善であるとも言えない。むしろその双方から、禁断の樹木の果実とは混淆物だと言われるのである。聖書はその果実を味わうことは、その身に触れた者たちを死へと導く(創世2:17)と述べている。これはとりもなおさず、真なる善とは本性的に単純にして一様であって、あらゆる二面性、逆性との共伴とは異縁なものだということである。だが悪とは多彩にして取り繕ったものである。ある仕方では考えられるが、経験によって判断されれば他様にも捉えられて、知すなわち経験による受容ではなく、死と腐敗との端緒にして前提となる。4. それ故にヘビは、過ちの悪しき果実を前もって示したが、それはヘビが悪を本性的に明瞭な形で示すことができなかつたためである。というのも人間は、いとも明らかな悪によって欺かれることはなかつたであろうから。むしろ悪は、何らかの華やかさでもって表向きを繕い、

感覚的な快楽をもって味覚に麻醉をかけ、聖書が述べるように、女にはもっともらしいと思われるまでになったのである。聖書はこう述べる。「見よ、女が見ると、その樹木は食すに美しく、見るからに目には喜ばしく思えた。また、想いめぐらすには時宜に適うように思えた。そこで彼女はその実を手に取り、食した」(創世3:6)。だが実をこのように食したことは、人間にとって死の母となった。かの実を提供することは、混淆したあり方であるが、御言葉はここで知性のことを明瞭に示唆している。聖書は、かの樹木は知性を意味しつつ、それに従って美と悪が知られるもの、としてこの木のことを、善悪を知れる者と命名している(創世3:5)。あらかじめ蜜で準備された罌の悪性によって、まずは感覚を甘やかに騙して美しいと思わせ、一方、手を伸ばして触れるものを腐敗させて、あらゆる悪の最たるものと化するのであるから。かくしてこの樹木は人間の生命を欺く「悪しき罌」として働いたが、そのとき人間、すなわちこの物的にも名的にも偉大なるもの、神的本性の似姿は、預言者が言うように、虚しさに似た者となった(詩編144:4)。

5. かくして似像は、われわれの内面で考えられるものよりも優れたものに向けて定められたものの、生に関して労多く憐れむべきものは、神性への類似性からは逸脱したものなのである。

第21章 復活とは、聖書の使信から読み取れるばかりでなく、
事柄の必然性そのものから連関の上で希望されるものであること。

(PG44, 201B) 1. だが悪とは、善き力を凌駕するほどに力あるものではない。われわれの本性の無思慮さは、神の智慧よりも力があつたり確固たるものであつたりするわけではない。変化したり変質したりするものが、常に同一であり善のうちに固着しているようなものに比して、より卓越していたり、より確固たるものであつたりすることは不可能だからである。神の意志が完全であり、かつ変わらず不変性を有するのに対し、われわれの本性が変化を被るあり方は、悪のうちに変わらず留まっていることがない。

2. 総じて、常に運動するものは、もしその方向性を善に向けて得るならば、通過する物の無限性のゆえに、前方への動きを決して止めることはないであろう。それは、求めているものの限界を決して見出すことがなく、捉えられたとすれば、必ず運動を停止するであろうから。だがもしそれが、逆向きの方向性を有するなら、悪の走路を終え、悪の極まる終着点にまで到達するまで、衝動の常なる運動性は本性による停止を決して見出すことがない。悪のうちな

る距離を走り終えたならば、必然的に善の方向へと運動を転ずることになる。悪が無現にまで前進するということはあり得ず、必然的な限界によって阻まれ、その結果、善による承継が悪の限界を引き継ぐことになる。このようにして、すでに述べたように、われわれの本性の常なる運動性が、最後には再び善き行路に向けて走り出すことになる。かつての運悪しき事どもの記憶により、再び似たような状況に捉えられることのないようにと思慮を働かせることによるのである。

3. かくしてわれわれには、再び善の中での疾走が起こるだろう。悪の本性が必然的な限界によって限界づけられていることによるのである。宇宙のことに通じた人々は、全世界は光に満ち満ちているが、大地という物的な障壁によって影は闇となるとする(ただしこれは、円錐型の物体の形状によるものであり、背面に関しては、太陽光線のために円錐状に閉ざされる。一方太陽は、何倍もの大きさをもって地球を凌駕し、四方より地球を光線でもって円環状に包み込む。円錐の突端において光を集合させ、その結果、もし何びとかににおいて、影が伸びる範囲以上にまで力が及ぶことがあるなら、闇によって打ち碎かれることなく、彼はまったく光のうちに抱かれることであろう)。ちょうどそのように、われわれに関しても考えるべきであるとわたくしには思われる。悪の限界に行き着いたならば、過ちの影の頂上にまで至り、再び光のうちに生きることになるだろう。同じように、善の本性は悪の限度を上回る。それはその無限性によるのである。

4. かくして再び楽園がおとずれ、再びかの「生命の木」である樹木が現れる。再び像の恵み、尊厳の価値が明らかにされるのである。現在、人生の必要に照らして神から人間にあてがわれている限りの事どものいかなる部分も、これらのうちのいかなる部分ともならないように、わたくしには思われる。むしろ希望は、どこか他の王国に属すものとしてあり、その希望の表現は、語るべからざる事どものうちに留まるのである。

第22章 復活がもし美しく善きことであるのならば、なぜ復活がすでに生起してはならず、むしろ時間的な一定期間をもって希望されるのか、と問う人々に対して。

(PG44, 204B) 1. だが論述の連関に留まることにしよう。おそらく誰か、思惟において翼を得て、かの希望にまで飛翔する者があるとしよう。彼はおそらく、人間の感覚と認識を超えた善き事どものうちに速やかには入ることがで

きないということを、苦痛にして処罰であると考え、望む事柄との中間にある時間を、恐ろしき期間と考える。しかしながら子供の一人の如く、快樂に関わる事どもが少しばかり遅延することを嫌悪して頑なになることは避けたい。万物は御言葉と智慧によって治められているのであるから、生じることの何事も、かの御言葉、そしてその御言葉のうちなる智慧に与からないと考えるべきではない。

2. そこであなたはこう問うかもしれない。「望まれることに向けて、直ちに苦悩の生の変容が起こらず、むしろ定められた然るべき時間の間、重く物質的な生が定められている理由とは何か」と。万物が充溢する結末が待っていて、その時には、人間の生はいわば轡から解放されるかのように、再び拘束なく自由な姿で、至福にして情動のない生へと駆け昇るのであろうか？

3. だがもし、われわれの追究する事柄の論述が真理に近づいているのであれば、真理はありのままの姿で明白に知られるであろう。かくして真理はわれわれの思惟を訪れるが、それは次のようなあり方においてである。わたくしが述べるのは、再び最初の次のような言葉を取り上げることににおいてである。神は述べる。「われわれは人間を、われわれの像として、また似姿として創ろう。そして神は人間を創った。神の像として人間を創った」(創世1:26)。すなわち神の像とは、あらゆる人間の本性のうちに認められるものであるが、その目標物を有している。しかるにアダムはまだ誕生していない。というのも土質的な形成物は、ある種の語源的な命名をもって「アダム」と呼ばれる(創世2:7)。これはヘブライ語を知っている人々が言っている通りである。それ故にかの使徒もまた、イスラエル人の祖国の言葉遣いを学び、卓越した仕方で、大地に起源を持つ人間のことを「塵でできた」と名づけている(1コリント15:47-49)。これは、アダムという呼び名をギリシア語に訳したような仕方によるものである。

4. こうして人間、すなわち総括的な本性は、像に則った在り方において成ったのであり、これは神にもまごう財産である。本性の充溢は、全能の智慧によってこのようにできたわけであるが、これは全体の一部というわけではなく、すべてが瞬時にできたのである。創造主はすべての結末を掌握していて、それは聖書が「彼の手のうちに、大地の限りがある」と述べている通りである(詩編95:4)。創造主は、万物を知悉し、万物の誕生の前にもその覚知において、人類が数に関する限り、各々の者の総数としてどれほどになるのかを収め取っていたのである。しかしながら、創造主は、われわれを制作する間に、よ

り劣った方向への傾き、および天使たちとの等しい高貴さから自発的に逸れ落ちるものを察知していた。そのために、卑しきものとの共同体性を加えて配しようと考えた。それ故、自らの似像のうちに、非理性的な部分をも何がしか混入させたのである。というのも、男性と女性に関わる差違は、神的にして至福なる本性のうちには存しないからである。むしろ創造主は人間の上に、理性に与からない動物の形成における特性を及ぼした。つまり、種族の増加を恵みとし賦与したという点は、われわれの創造に際しての崇高性には含まれないのである。創造主が、産み増し数を増やす力を人間に賦与したのは、神が自らの像として人間を創造した時点ではなく、むしろ人間を男性と女性の差違に応じて峻別した際なのである。この時に神はこう述べている。「産めよ、増えよ、そして地を満たせ」(創世1:28)。そのようなあり方は、神的な本性に固有の事柄ではなく、むしろ理性に与からない動物の特性だからである。それは人間の創造に先立って、動物たちの創造が語られる際に、添えてその次第が神によって示され、含意されている通りである。実際、男性と女性に関わる差違を本性の上に付与するよりも以前に、この声の力を、人間にその数を増大させる方向へと加えたのであれば、それによって動物たちが誕生するような誕生の形態を、われわれは必要としていなかったであろうから。5. かくして神の先見の働きにより、人間の充溢が、動物的な誕生を通じて生きてものへと導かれるということが前もって察知された。万物を、ある秩序と一貫性に基づいて統べる神は、われわれの本性の下方へ向かう傾向を、人間性にとってのそのような種類の誕生のために、総じて必然的なものにしたのである。神は、現在の段階から未来を同じように見抜き、この傾向が実現する以前からこれを察知していた。そして神は、人間の形成に適わしい時期をも前もって考えていた。かくして、予め描き出しておいた靈魂の登場に合わせて時間の設定を終え、この段階で神は、時間の流れゆく運動を停止させて、もはや時間を通じて人間性が生まれ出ないようにしたのである。かくして人間の誕生は終わりを迎え、その終了とともに時間は終わりを告げて、万物の再構築が成立した。人間性もまた、世界の再構築に合わせて変容し、腐敗した泥性のものから無情動の永遠なるものへと変わったのである。

6. このことは、かの神的な使徒も気づいていたものとわたくしには思える。すなわち彼は『コリントの教会への書簡』を通じて、時間の突然なる停止、および運動せる諸事物の逆の解体について語っている。彼はこう述べる。「わたしはあなた方に神秘を告げる。われわれが皆、眠りに就くわけではない。む

しろわれわれは異なる状態に変えられる。たちまち、眼を瞬かせる間に、最後のラッパが鳴る間にである」(1コリント15:51-52)。というのも思うに、人間の本性の充溢が、予め知られていた規準に従って結末に至るや、靈魂の数にはもはや余すところなく、また増大することもなく、諸存在物の刷新が、一瞬の時間のうちに生じるであろう、ということのをわれわれは学んでいる。使徒はこの一瞬の時間を、「眼を瞬かせる間」すなわち非持続的結末と呼んでいるのである。時間の頂点の最終的で最高の頂点に登り詰めた者には、いかなる部分もその頂点に遺されていないため、死による周期的変容の獲得はもはや不可能であった。そこでむしろ、もし一旦復活のラッパが響き渡り、死したものを覚醒させるなら、そして生のうちに取り残された者たちを、復活によって変貌した者たちとの類似性を通じて瞬時に不腐敗性へと変容させるラッパが鳴り響いたなら、もはや肉の重さが下方に向けて引きずり下ろすこともなければ、重しが大地に引き留めておくこともなく、彼は空を切って宙を行き来することになる。使徒は言う。「われわれは空中で主と出会うために、雲に包まれて引き揚げられる。こうしてわれわれは、いつまでも主とともにいることになる」(1テサロニケ4:17)。

7. 彼には、人間の成育のためにあわせ測られている時間を、待ち設けさせるがよい。アブラハムの周囲にいた父祖たちも、使徒が述べているように、諸々の善を目にしたいという欲求を持ち続けることで、天上の祖国を待ち望むことを諦めはしなかった。ただ彼らはわれわれと同様、より優れたものを神が見させてくれるという恵みをなお待ち望むことのうちにいる。これは使徒パウロによれば「わたしたちを除いては、彼らは完全なものとはされなかった」(ヘブライ11:40)ということになる。というわけで、かのいにしえの人々は、ただ信仰と希望だけを通じて善き事どもを目にし、使徒が証言しているように、彼らが望んでいる事柄が享受できるということの確かさを、告げ知らされた福音を信実なるものと考えることのうちにおいて喜び、遅延を耐え忍んでいるとしよう。ならばわれわれ多くの者どもが、何を為す必要があるだろうか。われわれには、すでに生きて来た事どもから、さらに優れたことへの希望はもはや存在しないのであるから。預言者の生命もまた願望のうちに潰えていったが、かの愛に満ちた情動は、詩編を通じて告白されている。詩編詩人は、自らが愛し希求する内容、自らの生命が主の前庭におかれ留められることを願う。たとえ最後の日々にあって打ち棄てられることになろうとも、彼処のうちに最期を迎えることができることは、罪びとたちの間で人生の幕屋を張ることに比し

て、いかばかりか優りまた貴いことであろうか、と実に、たとえ遅延が忍耐され得たとしても、かの場所での滞在、ほんの短期間であってもそこに与かり得ることは、一千年の時間に比してより貴いものだ、と詩編詩人は解するのである。詩人は言う。「あなたの庭での一日は、一千年に優る」(詩編 84:11)。だが詩人は、諸存在物をめぐる必然的経綸を難じてはいない。むしろ人間にとっては、善き事どもを、希望を通じて抱くだけで十分であり、至福に通じることだと考えている。それゆえに、詩人は詩編の最後にこう述べている。「諸力の神である主よ、あなたに希望を置く人は幸い」(詩編 84:13)。

8. というわけでわれわれは、望んでいる事柄のわずかばかりの期間の遅延について、これを嘆く必要はない。むしろ、いかにすればわれわれが、望んでいる事柄から遠ざけられずに済むか、努力を払うべきであろう。誰かある人が、より経験に乏しい人に向かって、収穫物の収穫は夏の盛りにした方がよく、そうすれば収穫はより満ちに満ち、食卓は収穫の時期に食物で満ち満ちるであろう、と言ったとしよう。だが好機の到来に急くなれば、この言葉は虚しいものとなろう。そして種を蒔き、自らのために入念に実りを準備することであろう。というのも好機とは、望む者が所有するものとなる一方、そうでないケースもあり、きつと定められた時に従って知られるからである。しかるにこの時宜は、自ら収穫の豊かさを求めて前もって準備する者と、まったく準備なく時間によって取り残されてゆく者によって、同じように知ることのできるものではない。わたくしは次のように考えるべきだと思う。それはすなわち、神による告知によって、次の事柄は万人に明白な事であろう。すなわち、時宜とは変化のうちに存するものであり、その時に関してあれこれ悩んだり(というのも、その好機や時を知ることは、われわれのなせる業ではないと主は述べている；マタイ 24:36)、それによって復活の希望に向けて靈魂を不健康なものにするような推測法を求めたりすべきではない。むしろ、期待される事どもに対する信仰に支えられて、善き生き方を通じて、来たるべき恩寵を待ち望みつつ獲得すべきであろう。

第23章 世界の創成の始原を認めるならば、
必然的にその終焉をも認めざるを得ないこと。

(PG44, 209B) 1. さて、世界の動きが何らかの連関のうちに管轄され、その動きを通じて時間的な経過が看取されるのなら、運動する事物に関して、前もって告げられていた静止が生じるであろうとは認められまい、とある人が述

べたとしよう。そのような者は、原初において、神の手で天と地ができ上がったということを信じないものであることは明らかである。というのも運動に端緒を与えた方は、その終焉に関しても十全に考慮しているからである。そして終焉を受け容れない者は、その端緒に関しても認めることはないのである。しかしながら、われわれは、ちょうど神の発語によって世々が完成されたと考えるのと同様、使徒が述べているように（ヘブライ 11:3）、目に見えるものは目に映らないものからでき上がったということを信じている。神の発語に関しても、われわれはこれと同一の信仰に拠り、神は諸存在の必然的な静止を前もって述べていたと考える。

2. しかし、それがいかにしてであったかという点をめぐる疑心暗鬼については、これを除去せねばならない。というのも、この点においてもわれわれは、信仰により、「目に見えるものは決して目に映らないものから成立する」ということを認めている。到達しえないものに関する探索は放棄するためである。しかしながら御言葉は、多くの事どもに関してわれわれが解決不能に陥ることを見越しており、信仰の対象となる事どもをめぐる疑念に対しては、小さからざる手がかりを提供している。3. なぜならこの件に関しても、論争好きな者どもにあっては、ロゴスに叶った事柄から逸脱し、連関によって信仰を放棄して、質料的な創造をめぐる御言葉は真実ではないと考えるに至ることがあり得るからである。この御言葉とは聖なる書物が先立って述べているものであり、諸々の存在物はすべて、その誕生を神に負うと明言されている。

というのも、これと対立する論理に立脚する者たちは、質料は神と同時的であるとの論を構え、教義に対して次のような論証を用いるのである。もし神が本性的に単純であるのなら、非質料的であり、非属性的であり、大きさもない。非合成的で、形質に関する記述とは異縁である。しかるにあらゆる質料は、時間継続的な伸長のうちに理解されるため、感覚器官を通じての把握を逃れることがない。つまり色や形態、重さ、大きさ、表面その他、それ自体に関して看取される事どもにおいて知られる。それらはいずれも、神の本性のうちには認知することができない。非質料的なものから質料が生成されるというのは、いかなるからくりによるのであろうか。時間継続的な本性が、いかにして非時間継続的なものから成るのであろうか。もし質料が神から生成するということが信じられるのであれば、明らかに、神の内にある諸事物が、語られ得ざるロゴスによってこのように誕生に至ったということになるだろう。だがもし質料的なものが神のうちにあるのなら、自らのうちに質料を有する方がどうして非

質料的なのであろうか。それと同様に、神以外の万物は、それらを通じて質料的本性というものが特徴づけられるのであるが、もし神のうちに量が存するのであれば、どうして神が非量なのだろうか。もし神のうちに合成性が存するのであれば、どうして神が単純で分かちがたく、非合成的なのであろうか。したがって、神にあって質料が生成するということにより、神が質料的であるのが必然であるということ、ロゴスは強いることになる。もしくはもし人がこの論を回避するというのであれば、質料は、万物の形成のために、神にあとから付与されたと仮定せざるを得なくなる。

4. しかるにもし質料が神の外にあるのであれば、永遠性の論理に照らし、神の他に、生まれざる者に併せて、何ものかを想定せざるを得ないということになる。かくして、ロゴスに従えば、互いに同一の論拠により、始めなく生まれざる二つのものが併せて了解されることが必須となる。それは、技術的に業を為すもの、およびその科学的なエネルゲイアを受け取るものの二つである。そしてもしある人が、この論の必然性から、質料を永遠なるものとして、万物の創造者(デミウルゴス)の下に置いたならば、マニ教の祖マニが固有の教説の補強点を見出したのと同じ結論に至る。彼は質料因を、生まれざる性質に則り、善き本性に対峙させたのである!

しかしながらわれわれが耳にしているように、聖書は「万物は神から成った」と述べ、われわれはそのように信じている。そして質料がいかにして神のうちに存したかということは、われわれの思考力を超える問題なのであって、われわれはそれを云々するには値しない。非存在を生起に導くということについても、存在するものに対し、相応しさに応じて質を付与するというについても、すべては神の力のうちに容れられている、とわれわれは信じているのであるから。

5. したがってわれわれは、諸存在にあっては、非存在からの生成に関して、神の意向の力が十分であると考えているに至っているのである。かくして生起した諸々のものの再構築をも、これと同じ力に帰し、蓋然性の外に出るものは何もないという信仰を抱くことであろう。とは言えおそらく、ある種の詭弁により、質料をめぐる論争する者どもが、無為に御言葉を略奪しているようには見せずに説得を行うことは、可能ではあろう。

第24章 質料と神とは同時的であると述べる人々に対する反駁。

(PG44, 212D) 1. 質料をめぐる理解は、連関に従って見出される事ども

から逸れていないように思われる。この理解によれば、質料は知性的および非質料的なるものから成立すると主張される。というのもわれわれは、質料はすべて、何がしかの性質から成立すると考えており、質料からもしその性質がそれ自体として剥ぎ取られるならば、言表によってはどのようにしても把握ができなくなる。だが実際、性質各々の形相は、ロゴスにおいて基体から分離される。しかるにロゴスとは何らか知性的なものであって、物的な考察とは無関係である。たとえば考察のうちに、何か動物ないし草木、またその他、質料的な組成をもつ他のものが置かれているとしよう。われわれは、想念に従って分割することにより、基体について多くを理解している。それらの各々のロゴスは、併せ考察される事物と、混乱を来たすことなく存する。というのも色に関するロゴスと、重さに関するロゴス、さらに量に関して、また接触に際してどのような固有性があるのかについてのロゴスは別である。柔らかさと「2ペキュス」、あるいはその他に語られる事どもは、相互にも、また個体とも、ロゴスにおいては共起しない。というのもこれらの事どもに、それに従っての固有の、解釈上の定義が想起されるのであって、基体に関して考察される限りの他の性質とは何ら共有されない。

2. というわけで、もし色彩が知性的なのであれば、抵抗もまた知性的であり、量も、それ以外のそのような特質もそうであるが、これらの各々がもし基体から取り去られるならば、物体の理拠はすべて瓦解してしまう。その結果、ある事物の不在を、物体の解体の原因として見出すならば、われわれは必然的に、質料的な本性がそれらの共起を生むのだという仮説を立てることになるだろう。というのも色とか形とか抵抗とか長さとか、重さとかその他固有の性質が附随していない物体は存しないし、それらの各々は物体ではなく、何か物体以外のものであり、個々に固有化させる原理に従って見出されるものである。それと同様に、逆の側から言えば、語られたような事どもが生起する場合であれば必ず、物的な存立を形成するということになる。だがもし、これらの特性を想起することがもし知性的なのであれば、神性もまた、その本性において知性的だということになる。諸物体の生成のために、これらの知性的な端緒が非物質的な本性から成立するということは、あり得ないことではない。つまり、知性的本性は知性的諸力を成立させる一方、これらが相互に共起することで、質料的な本性を生成に向けて導くということである。

3. だがこのような議論は、われわれにとって余計なことだと判断したい。われわれとしては、再度信仰へと論述を引き戻さねばならない。信仰によって

われわれは、聖書の記述により、万物が非存在から生成したと受け取っており、さらに他の状態へと変質したと教えられていて、疑うことがないのである。

第25章 教会の外部にいる人は、復活を教える聖書に信を置くことに対し、どのように困難を感じるのだろうか。

(PG44, 213C) 1. だがある者はもしかすると、解体した身体に眼差しを投げ、固有の力の範囲に照らして神性を判断しつつ、復活の論は不可能であり、現在運動しているものが停止し、その後復活するということはあり得ないと言う。即ち彼らは、現在運動していないものは、やはり運動を受け容れることはないと言うのである。2. だがそのような説に立つ者は、復活に関する真なる証拠を第一のそして最大のものとするがよい。復活の証拠は信に値するものであるのだから。しかるに、語られた事どもの信憑性は、その他すでに語られた事どもからの結果に、その裏づけを得ている。というのも神の書は、多くのそしてありとあらゆる種類の論述を提示しているため、他の語られた事どもを目にするとき、それがどの程度虚偽もしくは真実であるのかをめぐって、それらを通じて復活に関する教説を考察することが可能なのである。もし他の事どもにおいて論述が虚偽であり、真実から逸れているとして論駁されるのであれば、この説はまったく虚偽から脱していない。だが他のすべてを真理に照らして証言する証拠が存するのであれば、これらを通じ、連関からして復活に関する言表が真であると考えるべきであることになろう。というわけでわれわれは、前もって告げられていた事柄を一つ二つ思い起こし、事前に語られていた事どもに、結果を対置させることにしよう。それらを通じて、御言葉が真理を眼差しているかどうかを知るためである。

3. 誰か、古代においてイスラエルの民がどれほど栄華を極めていたか、知らぬ者があるだろうか。彼らは世界中のすべての王朝に比せられるほどの勢力だったのである。そして都エルサレムの王宮はどのようなものだっただろうか。その城壁、その塔、あるいは神殿の偉大さはどれほどのものだっただろうか。これらは主の弟子たちにも驚嘆に値するものと考えられ、彼らは主がこれを讃嘆する価値があるとした。彼らは、目に映る光景に対して驚嘆の態度を示したのであり、これは福音書の記述が明らかにしておりである。弟子たちは主にこう述べている。「何という偉業、何という建造物でしょう！」(マルコ 13:1)。これに対して主は、この場所に起こるであろう荒廃、そしてかの

美しきものの倒壊を述べ、現在の姿に讃嘆している弟子たちにそれを示しながら、現に目に映る事どもも、ほどなく何も残らなくなるであろうということを明らかにしている。だがそればかりではない。受難の折には、婦人たちが主に付き随って、主に下された不正な判決を嘆いた。彼女たちは、生じた出来事の経緯には目を注いでいなかったためである。これに対して主は、自分に関して生じる出来事については沈黙を守るよう勧告する。なぜなら涙するには値しないからである。そして都が占領者たちによって攻囲されるときにこそ、この嘆き・悲しみの上に真なる涙の時を置くべきことを説く。それとともに、受難とは、いまだに起こっていない事柄をこそ、最大の幸いと見なすべきほどの連続性において到来することを説くのである。この中で主は、嬰兒殺戮の罪をも予告し、「その日に、子供を産んでいない胎は幸いなものとされるであろう」（ルカ 19:43）と述べている。いま、かの王宮はどこにあるのだろうか。神殿はどこにあるのか。城壁はどこに？ 塔の防壁はどこにあるのか。イスラエル人たちの王朝はどこにあるのか。彼らはほとんど世界中すべての場所に、各人散在しているのではないか。そして彼らの散逸とともに、王朝もまた転覆したではないか。

4. というのもわたくしには、主はこのようなこと・この類の事柄を、前もって告知知らせようとしたように思われるのである（必ずや起こるであろうことの予言というものは、聴いている者たちにとって大きな益となるものではないだろうか。というのも人間は、経験によって知ることはあるだろうが、将来起こるであろうことを予め知ることにはできないのだから）。ただそれはこの場合、この事柄そのもののためではなく、それらを通じて、その結果人々がより大いなる事どもに関する信仰に至るという目的によるものであった。これらの記述のうちには、業を通じての証言、そしてそのうちに隠されている真理の証拠立てが含まれているからである。

5. 例を挙げることにしよう。誰か農夫がいたして、彼が種子の力を教えてくれたとしよう。農業に通じていない者は、これを信じないということが起こり得る。真理の立証のためには、農夫が、1 メディムノスの小麦の種子の持つ力を示すだけで十分である。一本の小麦、あるいは一本の大麦、あるいは何であれ、たまたま1 メディムノスちょうどのものが、土壌に蒔かれたあと、穂となるのが目にされたとしよう。もはや一人の農夫をめぐってであっても、それ以降のことについて信じないということはありません。それと同様に、わたくしには復活の神秘に関する証言についても、語られた事ども以降の事柄に、

真理が同意しているということだけで十分であると思われる。

6. さらにむしろ、次のような経験も同じ復活に関わることである。それは、論述によるよりもむしろ、業そのものによりわれわれが教わっていることである。復活をめぐる驚異は、偉大にして信仰を超える事柄である。奇跡的事績よりも低い次元の事柄から始めて、主は少しずつわれわれの信仰をより大いなる事柄へのものに慣らしてゆく。

7. 適切に幼児に乳をやる母親があるとしよう。彼女は、まずは柔らかくしなやかな口に、乳房で乳を含ませる。だがもう歯が生えて成長して来ると、パンを与えるが、まだ粗くなく焼きが入っていないパンである。それは、食物の固さのために、まだ柔らかく慣れていない歯茎が傷つくのを防ぐためであり、むしろ自分の歯で噛み砕くことで、委ねられた者の力に見合った相応しいものとするためである。さらに力が備わって来ると、比較的柔らかいものに幼児はもう慣れているので、母親は静かに幼児をより硬い食物に慣れさせる。ちょうどこれと同じように、主は人間の靈魂の卑しさを、いわば未完成の幼児のように、驚くべき事どもでもって育み養う。まずは癒しがたい病の最中という設定で、復活の力を示す譬え話をする。これは偉業としては偉大なものであるが、信じがたいものとして語られたというわけではない。主は、シモンの姑を苦しめていた高熱を叱りつけた。それはこの災いに対して非常に大きな変容をもたらし、姑はもう死を待つばかりであったのに、その場にいる人々に給仕できるまでに力を回復したのである(ルカ4:38)。

8. しかる後、主はさらに力に関して増加させ、王の役人の息子の話をする。この息子は、誰の目にも明らかな危険のうちにあった(福音書には「彼は死なんとしていた」と記されている(ヨハネ4:46)。そこで父が叫んだ。「子供が死ぬ前に降りてきてください!」。こうして再度、もう死んでいると信じられた者についても、その復活を実現させ、主はより大いなる力においてこの驚異を引き起こした。つまり場所的に近づくのではなく、命令の力に対し、遠方より生命を遣わしたわけである。

9. だが主はさらに、連関に沿って、より崇高な驚異へと登攀を続ける。すなわち、会堂長の一人娘には、喜んで寄り道のために時間を割き(マルコ5:24)、流血症の女性には、知られていなかった治療法を告げた(マルコ5:34)。つまりこの期間中、死がこの病める女性を押し続けていたのである。まさしく今靈魂が身体から分かれ、苦難に満ちた嘆きのうちに、悲しみとともに悼む人々が声を挙げる中、主は、あたかも眠りの中から命令の言葉でもって再び生

命へと少女を立ち上がらせ、人間の持つ不死性を、一つの道筋と連関をもって更なる偉大さへと止揚したのである。

10. さらにこれらに加え、主は驚異でもって凌駕し、より崇高な力を通じて人々に、復活をめぐる信仰を切り開いて見せる。聖書は、ユダヤの町ナインについて語っている（ルカ7:11）。この町のやもめに、一人息子がいた。もはや、小児の域に属するような子供ではなく、すでに子供から青年へと成熟した一人息子であった。御言葉は彼を「若者」と呼んでいる。この話は、簡潔ながら多くのことを語っている。物語はそのまま哀歌である。御言葉は語る。「このやもめは、死んだ子の母親であった」と語られている。あなたはこの不幸の重みが判るだろうか。何と短い表現のうちに、御言葉はこの悲しみを劇的に表現していることだろうか。テキストはどのようになっているだろうか。彼女には子を儲ける希望はない。その希望は、先立ってしまった者に関する不幸を癒してくれるはずであった、やもめは女性なのだから。彼女は、亡くなった息子の代わりに別の男子に目を注ぐこともできない。その子は独り子だったのである。そしてこの子に降りかかった災いがどれほどのものであったかについては、本性から追放されていない者にはみな、容易に理解できることである。このやもめは、陣痛の際にこの子だけを知り、両の乳房でこの子だけに乳を与えた。この子だけが彼女のために、食卓を喜ばしきものとした。この子だけが家庭における喜びの基であった。この子は戯れ、努力し、鍛錬に励み、喜びに溢れ、成長期にあり、体育学校に通い、若者の集いの場にあった。母の目にとって甘美なもの・価値あるものはすべて、この子だけなのであった。すでにこの子は婚姻の時を迎えていたが、この子は一族の若芽、承継の若枝、老齢の杖であった。だがそればかりではなく、これから年齢が重なってゆくことは、別の哀歌であった。若さは、陰りゆく時間の華と言われるわけであるが、その頃、若者はうぶ毛に黄色が混じっていて、まだ顎ひげも生え始めておらず、なお頬の美しさが輝きを放つ年頃だったのである。母親は、この息子に関してどのような目に遭うことが予期されただろうか。この子のために悲痛な哀歌が献げられるときは、さながら内臓を炎で焼きつけられるが如くであった。前に置かれた亡骸を彼女はかき抱き、死者に弔いの儀を急ぐというのではなく、むしろ悲しみのうちに浸るために、最大限息子のために嘆きを尽くしたのである。御言葉はこのことをも省いてはいない。彼女を見て、イエスは胸を衝き動かされ、近づいて棺に手を触れた。人々は棺をささげ持ったまま立ち尽くした。するとイエスは言った。「若者よ、わたしはあなたに言う、目覚めよ」。そしてイエス

は、息子を生ける姿で母親に返したのである。彼が死者となってから、すでに短くない期間が過ぎていたものの、まだ墓に納められていない分だけ、主自身の手で、より大いなる驚異だがそれに等しい命令が下され得たのである。

11. さらにこの驚異はより崇高な事柄へと進展し、展開は復活をめぐる信じがたき驚異へと近づく。主の友人で主が愛していた者が、病に罹った。彼は、その名をラザロといった(ヨハネ 11:1)。主は友が病んでいる際に、遠方であって面会を求め、生命の不在の間に、死が病を通じて自らの働きを為すための場所と力を見出せるよう計らった。主は弟子たちにガリラヤのあたりで、ラザロの病状について告げる。だがそればかりでなく、臥せている友人を目覚めさせたいという、自らの意欲についても知らせる。これに対し、弟子たちは消極的であった。それはユダヤ人たちの残虐さの故であり、人殺しどもの間を通して再びユダに赴くのは、困難であるし危険が伴うと考えたためである。それ故彼らは、ガリラヤからの帰還を予定しはしたものの延期させ、時をおいて行うことにした。だが彼らの説得は説き伏せられ、弟子たちは主に連れられて出発したが、こうして彼らは普遍的復活の始まりをめぐり、ガリラヤにおいて言わばその手ほどきを授かることになったのである。

すでに悲しみ以降4日が経っていた。故人のための儀はすべて尽くされ、亡骸は墓に納められた。すでにその姿は、通常よりも膨張し、腐敗も解体に向けて進行していた。土はカビのためにジメジメしており、必然的に亡骸は碎け始めていたのである。腐敗臭がするほどに解体が進んだ亡骸を、再び活けるものへと戻すことは、自然が強いるなら、避けられるべきことであった。このとき信じがたく普遍的な復活の業が、より明白な驚異の姿を取って実証へと移された。これは、困難な病から誰かが蘇ったというのでも、息を引き取らんとしている人が生命へと呼び戻されたというのでも、死んだばかりの子供が蘇ったというのでも、墓場に引いて行かれるはずの若者が再び棺から解放されたというのでもない。まだ成人していない男で、死して日を経過し、すでに膨張して、腐敗も始まり、親友たちにとっても、その墓に近づくことが許されなかった者に生じた奇跡である。主は、斃れた者の身体に含まれる不快のゆえに、ただ一言をもって彼を生命体にした。復活の使信、すなわち一般的に予期される事柄、われわれが部分的には経験によって学んでいる内容を信じられるものとしたのである。使徒が述べているように、万物の再統合の際には、大天使の号令の下、主自らが下り来て、ラッパの音とともに死者たちを不滅へと復活させるとされる(1テサロニケ 4:16)。ちょうどそのようにこの度もまた、墓の中にいた者

が主の命令の声とともに、死を眠りか何かのように棄て、死性に至る腐敗を自らから振り払い、まったき無傷な姿で墓より出てきた。この脱出の際、彼は両足や両手を縛っていた包帯の鎖に束縛されてはいなかったのである。

12. 一体これらの事どもは、死者の復活をめぐる信仰に照らして些細なことであろうか。あなたがこのことに関する判断を、他の事柄によっても固めることを求めるならどうであろうか。わたくしには、カファルナウムに関することに言及するのも無駄ではないように思われる。すなわち主は人々の面前で、次のようなことを自らにこと寄せて述べている。「きっとあなた方は、次の格言を思い起こすことだろう。医者よ、あなた自身を癒せ」(ルカ 4:23)。というのも、他の人々の身体において人々を復活に関する驚異へと習慣づけた主は、自らの人間性の中でこの教説を固める必要があろうというものである。あなたは、他の話においてこの教説が有効であったことを知っている。すなわち、死なんとしていた人々、ちょうど生きることを止めたばかりの子供、墓に納められようとした若者、腐敗の始まった死者、彼らはすべて等しく、一度の命令でもって生命へと解放された。これらの事どもに加えて、生命をもたらす力の何らかのほころびがこの恵みを失わせるのではないかと考え、傷と血を通して死に至った人々の例をも求めるだろうか。それならば、両手を釘に貫かれた主を見つめるがよい。わき腹を槍で貫かれた主を見つめるがよい。釘あとにあなたの指を伸ばしてみるがよい。槍による傷跡に、あなたの手を入れてみるがよい(ヨハネ 20:27)。その槍がどれほどまで内臓に突き刺さったに違いないかを、きっと推測することができるだろう。その傷の幅を通して、内臓に及んだその距離を考えて見よ。この傷が、人間の手が入る分だけの幅を持っているなら、その武器がどの程度まで奥に刺さったかが示されるのではなからうか。もしこの方・主が蘇ったとすれば、使徒の言葉を復唱するのが有効であろう。「ある人々が、死者の復活などないと言っているのはどうしてなのか」(1コリント 15:12)。

13. さて主の言表はすべて、すでに起こった事柄の証言を通じて真であることが立証される。それは記述によってわれわれが学び知るのみならず、生命へと復活によって戻り来たる人々自身から、その業を通じて告知の証拠をわれわれは受け取っている。信じない者たちにはいかなる手がかりが残されているというのだろうか。哲学と虚しき虚偽を通じて、混乱した信仰を打ち出す者たちに、われわれは「あなた方は力を出せ」と言いながら、純粋な信仰告白に立脚する以外にないのではなからうか。預言者を通じて、恵みのあり方を少しば

かり学ぶことにしよう。詩編詩人はこう言っている。「あなたが息吹を取り上げれば彼らは息絶えて元の塵に戻る。あなたが自らの息吹を送って彼らは創造され、あなたは地の面を新たに作る」(詩編 104:29, 30)。主が彼の業に喜びを為す、と言っているとき、罪びとたちは地の面から取り去られる。罪が存在しないのに、どうしてある人が「罪びと」だと名づけられるだろうか。

第 26 章 復活は、真理から逸れてはいないこと。

(PG44, 224B) 1. だが人間の理性の弛緩ゆえに、神の力をわれわれの尺度に照らして判断した場合、われわれに無理なことは、神にも不可能だという論を立てる人々がある。というのも彼らは、古代の故人たちの消滅、火葬に付された人々の遺灰、さらにはこれらに加え、肉食性の動物を論証に加える。自らの体のうちに、航海する人の体を飲み込む魚を引いて、この魚もまた人間にとっての食料となること、そして消化によって、食した側の重量に加えられることを持ち出すのである。そしてこのような、幾多の取るに足りない事柄、神の偉大なる力と権能には値しない事どもを、教義転覆のために述べる。「神であっても、自らに固有の事柄を、人間のために解体を通じて再構築(アポカタスタシス)することは、再び同じ道筋によっては不可能である」と。

2. だがわれわれとしては、彼らの論理的な虚しさの長大な周り道を、少しばかり近道することにしよう。すなわち、身体の解体とは、身体がそれをもって構成されている物質へと向かうことで生じるということにまず同意しよう。神の御言葉によれば、大地は土に解体するのみならず、むしろ大気や湿分も、同種のものへと進みゆき、われわれのうちなる事物各々の、同起源的なものへの移行が生ずる。それは、人間の身体が、肉を食らう鳥類に食べられるにせよ、あるいは極めて残忍な獣類に混じり合うにせよ、もしくは魚類の菌の餌食となるにせよ、火のために蒸気や灰に変化するにせよ同様だとされる。だが、人が人間を、議論を通じ仮説上いかなる場所に位置づけるにせよ、人間はまったく世界の中に存する存在である。人間が神の手によって支配されているということについては、神の息吹を受けた声が教えている。したがってもしあなたが、あなたの掌の中にある何かについて知らないことがあったとして、あなたは一体、神の掌のうちに収められる事柄の正確さを確かめることができないからという理由で、神の智慧の方が、あなたの力よりも弛緩していると考えたりするだろうか。

第27章 人間の身体が万物の要素へと分解されるとき、各々にとって固有のものが再び共通に掬い取られるということが、いかにして可能であるのか。

(PG44, 225A) 1. だが万物の諸要素に目を向けるなら、われわれの内なる大気、あるいは熱分や湿分が、またそれと同様に同質のものと混じり合っている土質のものが、同起源的な要素に注ぎ出され、再び共通してその固有の性質が、それぞれの固有の場所へと遡行するという事は困難だと思うかも知れない。

2. すると、人間的な例に基づき、このこともまた、神的な力の限界を凌駕することはないということを考えないだろうか。おそらくあなたは、総じて人間の家屋にも、共同体から集められたある種の動物たちの群れがいるということをご存じであろう。だがその群れが再び捕獲した者たちの手に委ねられるや、その家屋への習性や、刻印された特徴は、当初のものへと還帰する。あなた自身に関しても、これと同様なことを思い巡らすなら、的確な理解から外れることはあるまい。

すなわち靈魂は、共棲してきた身体に対する自然的性向や愛情のために、靈魂には忘れられた記憶に沿って、固有のものとの和合を通じてなされる自然本性や認識のようなものがある。これは、言わば本性から来たところのある種の徴であって、これらを通じ、共同体性というものは固有性とは切り離されて混淆しないまま留まる。では一体、靈魂が、同起源的で固有のものを再度自らへと引き寄せるとき、神的な力によって固有性の共合を阻むような労苦とはどれほどのものであるか、言ってみてほしい。それら固有のものは、本性の言わば表現し難い牽引によって、本来のものへと接近するというのに。靈魂には、われわれとの合成物としての徴が、解体の後にさえ、いかばかりか残る。このことは冥府における対話において明らかにされているところであり（ルカ16:24-31）、身体が墓場に委ねられる一方で、身体的な徴は靈魂に残る。それによってかのラザロは認知され、富者も知られないわけではなかったというのである。

3. かくして、一般的なことから固有のことに進み、復活した身体にも再度帰還が生じると信じることは、あり得べき事柄を外してはいない。われわれの本性をより丹念に吟味している人を信ずるなら、そういうことになる。われわれの本性は、完全に流転や変化のうちにあるわけではない。総じて、本性からは決して静止は獲得されないという解釈では、理解しがたい面があろう。より正確な論に従うなら、われわれの内のあるものはそのまま留まり、あるものは

変化を経て進みゆくということではなかろうか。つまり、身体は増大と減少を通じて変化するが、その様はあたかも衣服のようであり、以降の年齢増加を纏うかのである。しかるに自らの上に帯びる形相は、あらゆるあり方を通じて不変のまま留まり、本性によって自らの上に一たび投げられた徴から逸脱することはなく、身体が経験するあらゆるあり方を通じて固有の特徴とともに現れ出る。

4. 疾病による変化、すなわち形相の上に生ずる変化については、論述から外しておかれない。というのも疾病ゆえの醜悪さは、いわば異種の仮面のごとくに形相を覆うが、ちょうどシリア人ナアマンに生じたように(列王記下5)、あるいは福音において語られているように(ルカ4:27)、その疾病が御言葉によって取り除かれるとき、疾病によって隠されていた形相は、再び固有の徴のうちに健康さを通じて現れ出るのである。

5. さて、靈魂の神的な部分は、変化における流性や変転ではなく、むしろわれわれという合成物のうちに、一にして同一なるものとして、その部分に増し加わる。そして混淆がいかなる次第であるか、ということは形相に則った相違を順次作り出してゆく。その際、混淆とは諸要素の混ざりあいに従ったものに他ならず、ここで諸要素とわれわれが呼ぶのは、万物の構成の基層にあってそれによって人間の身体も構成されているものを指しているため、必然的に形相はいわば指輪の押印のごとくに靈魂に留まる。指輪に範型を押しつけた部分は、指輪によって知られないことはなく、むしろ再構築の機会に、形相の範型に適合するものは何であれ、これを再び自らに向けて取り込む。しかるに原初において形相に刻印されていた限りのものは、総じて適合すると言える。というわけで、固有のものは再度、共通のものから各々のものへと帰還すると考えて、的を外してはいない。

6. 水銀は、周囲を取り囲んでいて下部にある塵に満ちた場所へと注ぎ出されると、微細な小球体状に固まって地面に向けて碎け、遭遇する何ものとも交わりあわないと言われている。だがもし誰かが、あちこちに撒き散らされたものを再び一つに集めるならば、同族のものへと自動的に注ぎ出され、中ほどで同族物の混淆をはばまれるということはない。人間という複合物に関しても、そのようなことを何か考える必要があるのではないかとわたしは思う。もし神から、序曲ふうの力だけがもたらされるとすれば、固有のものに相応しい部分は、自動的に再度結合し、本性を再構築するものの中には、それらを通じていかなる困難も生じることがない、という状況である。

7. というのも大地のうちに生えているものには、小麦にしても、黍にしても、その他いかなる穀類・豆類の種子にしても、茎や禾や穂に変容する際に、本性上いかなる困難も認められない。相応しき食料が、共通の庫から自動的に、何の問題も生じることなく、各々の種子の特性に応じて与えられるのである。したがってもし、すべて生え出でるものに共通の湿分が与えられたとすれば、その湿分によって育つものどもがそれぞれ、固有の成長のために適わしきものを吸収するのであろう。したがって復活の説明においても、復活する者どもの各々にあって、種子の場合と同様に、個々の相応しきものの引き寄せがこうして生じるとは考えられないだろうか。8. したがって、これらすべてから学び取ることができるのは、経験によって知られるに至った事ども以外の事柄については、復活の使信は何事も含んでいないということなのである。

9. 実際、われわれの論題のうち最もよく知られている事柄について、われわれは沈黙を貫いてきた。わたしが言っているのは、われわれの存立の最初の原因そのものことである。というのも誰か、本性の驚嘆すべき創造を知らない者があろうか、母親の胎が何を受け取り、何が作り上げられるかについてである。あるいはあなたは、身体の存立の原因として、全体的に均質なものがいかに単純な方法で内臓に据えられるかを知らないだろうか。また、形成される複合物の多彩さを、どのような記述が記しおおせるだろうか。このようなことを共通の本性から学び取っていなければ、生じた事柄を、誰があり得る事柄だと考えるだろうか。このような偉大な事柄に比して、その端緒はいかにも短く無にも比すべきものなのだから。わたくしが述べるのはかの偉大な事柄、すなわち身体に関しての形成ばかりでなく、それにも増して驚嘆に値する事柄を目にしてのことであり、それはまさしく靈魂そのものであり、また靈魂をめぐって看取される事柄のことである。

第28章「靈魂は身体に先立って成立する」、あるいは逆に「身体は靈魂に先立って形成される」と主張する者たちに対して；この中で靈魂輪廻説の神話が論駁される。

(PG44, 229B) 1. というのも、諸教会の中で、靈魂と身体に関して教説が一致していない点について吟味することは、われわれに課せられた問題から逸れることではなからう。われわれに先立つ人々、すなわち『起源について』という論文が記しているような人々は、靈魂とはいわば、独特の生き方のうちにある民の如くに、先んじて成立しているのだと主張するのが正しいとする。

だがこの民のうちにも、悪徳と美德との規範が存している。つまり、靈魂は美のうち留まっているのであって、身体との連なりとは無関係のままであるとされる。もっとも、もし善への与かりから逸れることになるなら、この世での生に沈み込み、かくして身体のうちに入るのだとされる。

また別の者たちは、人間の創造をめぐるモーセによる説明に固執し、靈魂は時系列の上で身体に次いで2番目であると主張する。神はまず大地から土塊を手に取り、人間を作った。しかる後その鼻を通じて人間を生けるものとした、というのである(創世2:7)。このような叙述のゆえに、彼らは靈に比して肉がより高貴であり、靈は、先に作られた肉を認可しているのだとする。つまり彼らは、靈魂は肉体を通じて成ったのであり、それはいわば、形成物が息吹なく運動なきものではないようにするためであったと解するのである。だが、何かを通じて成ったものは、総じて、その何かよりも、すべて高貴さにおいて劣る。ちょうど福音が述べているように、生命は食物よりも優れたものであり、身体は衣服よりも優れたものである。なぜなら食物や衣服は、生命や身体のためにあるものだからである(マタイ6:25)。つまり、靈魂が食物のためにあるのではなく、衣服のために身体が創造されたのでもない。むしろ靈魂や身体が存し、食物や衣服は必要のために加えて見出されたのである。

2. かくして、これら双方の見解にあって、彼らの論はいずれも批判の対象となる。一方は、靈魂が一種固有の状態のうちに先行して存したということを神話的に語っているのに対し、もう一方は、靈魂が身体よりも後に創造されたと考えているのである。これらの教説のうちに語られている事どものいかなる部分も、吟味せずに看過することのないようにすることが必須であろう。しかしながら、双方の側の主張を、正確を期して吟味し、それらの判断のうちに含まれているすべての誤謬をあぶり出すためには、長大な時間と論述とを必要とする。そこで簡潔に、可能な限りにおいて、各々語られた内容を概観し、再び現在の課題を把握することにしよう。

3. まず、第一の説に立つ人々、すなわち靈魂の生を、肉のうちにおける生命よりも先行するという教説を立てる者たちは、ギリシアの学説から脱却していないようにわたくしには思われる。その人々とは、靈魂転移説という神話的学説を説く者どもである。もし誰かが正確に吟味してみるならば、この点に関して、あらゆる必然性をもって彼らの論が崩壊していることが見出せるであろう。その論とは、彼らの側に立つある賢人が主張した説である。その説によれば、その人物は男性であったが、女性の身体を帯び、鳥とともに飛翔し、樹木

として育ち、水中での生を送るに至った、という。わたくしの判断によれば、彼について次のようなことを述べる人は、真理から遠く逸れてはいないように思う。すなわち同一の靈魂が、かくも多くの動物を経巡って往来するというこのような教説は、まさしくカエルやカラスの戯言、あるいは魚の無駄話、ないし樹木の無感覚なあり方に相当する、と。

4. しかるにこのような愚かしさの理由とは、靈魂が先在すると考えることのうちにある。このような教説の端緒は、連関の上で、この議論を隣接した次の段階に進め、そのような段階にまで不思議な話を行い説明するのである。もし何らかの悪のために、靈魂がより崇高な生から引き離されることになれば、(彼らが言うには)靈魂が一たび肉的な生を味わった後、ふたたび人間となる。だが肉のうちなる生は、永遠にして肉とは無縁な生に比して、総じてより情動に満ちた生であることが推測される。そのような生のうちには靈魂が置かれたならば、その生にあっては、多くの人々が罪を犯し、より甚だしい悪のうちに陥り、以前よりも情動に満ちた状態になるという状況が、あらゆる必然性をもって生じる。しかるに情動とは、人間の靈魂に固有のものであり、非理性的な状況への類似である。靈魂がこのような非理性性と関連を持つに至るなら、獸的な本性へと墮ちる。だが、一たび靈魂が悪を伴って旅を始めても、理性に与らない動物のうちに収まることはなく、いつかは悪への前進が止む。こうして悪の停止は、徳にならった前進の端緒となる。しかるに、徳とは理性に与らない動物には存しないものである。したがって悪は必然的に、常により劣った方向へと変化するものであって、必ずより高貴さに欠ける方向に前進し、常に、そのうちに存する本性よりも劣ったあり方を見出す。ちょうど感覚が理性の下に置かれるのと同様、感覚されるものからさらに感覚されざるものに向けての頹落が生じるのである。

5. しかしながら、彼らの議論がこのあたりまで進むなら、もし真理から逸れているとすれば、いわば、連関によって不合理性からさらに不理性を受け取っていると言える。このあたりの文脈においてはやくも、彼らの教説は、首尾一貫性のなさのうちに、神話的に語られている。連関が絶対的に、靈魂の腐敗を示しているのである。一たび崇高な生き方から滑り落ちるや、靈魂は悪のいかなる域においても踏みとどまることができず、情動に向かう状況のために、理性性から無理性性への変質を迫られる。ここからは、さらに植物の無感覚性に向けて転じるであろう。だが無感覚性の隣には、無靈魂性がある。そしてこの無靈魂性に続くのは、非存在性である。かくして、総じて連関により、

彼らの靈魂は非存在に向けて退いてゆく。こうなると靈魂にとっては、再びより優れた方向に向けての登攀はあり得ないということになる。だが彼らは、樹木から人間に向けて靈魂を上昇させる。確かに樹木における生命は、非物質的な生命に比較すれば高貴ではあるということ、この論から彼らは示すのである。

6. というのも、より劣った方向への歩みが靈魂に生ずるなら、おそらくはより下向きに進むことであろう。非靈魂性は、非感覺的な本性を被るが、この非靈魂性とは、彼らの教説の端緒が靈魂を導いた先である。だが非感覺性のうちに靈魂を閉じ込めるにせよ、彼らはそのようにはこの論を望んでいない。あるいはたとえこの世において靈魂を人間的な生に連れ戻そうとも、述べられているように、樹木的な生の方が、最初の状態よりも高貴であるということ、彼らは示す。あるいは、もし彼岸において悪への頹落が生じたのであれば、此岸では徳への登攀が生じることになる、とする。7. というわけで、このような論述はまったく首尾一貫しておらず矛盾だらけであって、非難されるべきものである。こうして、靈魂が肉のうちなる生より以前に生きていて、悪によって身体につなが留められたとする教説は却下される。

一方、靈魂は身体よりも新しいと主張する者たちがあるが、その矛盾はすでに、上述の議論によって示されたところである。8. かくして、双方の見解は等しく論破される。われわれの教説は、二つの見解の中央をもって、真理のうちに正されるべきであると考え。すなわち、まずはギリシアの迷妄の影響下に、何か悪のうちに万物に相伴う靈魂が鈍重となり、運動の鋭さをもって軸とともに走行することが不可能だからというので、地に墮ちると考えることは許されないということである。一方逆に、御言葉によって人間は、いわば粘土製の彫像のように創造され、そのために靈魂もでき上がった、と述べることも許されない。というのも粘土製の形成物の知的な本性は、高貴さを欠くということが示されるからである。

第29章 靈魂と身体にとって、その存立の端緒は一にして同じである、
ということをめぐる議論。

(PG44, 233D) 1. だが人間は、靈魂と身体から成立するものとして一体を成し、人間の生成の端緒は一にして共通であると仮定されている。つまり、人間が自らよりも生まれにおいて早かったり若かったりするのではなく、そのうちの肉体的なる部分が先行し他の部分が遅れるといったことはない。だが神

の予見する力により、少しばかり先に行った論述のなかで、人間の充溢がすべて先に成立すると言われていた。このことに関しては、預言書が証言している(タニエル補遺スザンナ42)。それは、万物の生成よりも以前に、神が万物を知っていた、というものである。だが一つ一つのもの創造行為において、ある要素が別の要素に先行するということはありません。靈魂が身体に先行することも、その逆もあり得ない。それは人間が、時間的な差違のために分断され、自らに対して内乱を起こすようなことがないようにするためである。

2. というのも使徒の教えによれば、われわれの本性は二重であると考えられる。目に見える人間性と、隠れた人間性とである(2コリント4:16)。もし一方が先行して存在し、他方がそれに続くとなれば、創造主の力が不完全であるとして反駁されるであろう。つまり、万物に変わらず及ぶものではなく、その業に関して分断され、各々に関して半分の部分で辞めたということになるからである。

3. だが例を挙げるとすれば、穀物あるいは何かほかの種子の中で、穂・草・茎・中央部分・実・ノギの形相は、すべて可能態のうち予め取り込まれている。これらのうちのいかなる部分も、本性のロゴスの内に先に存在していたり、種子の本性に先在していたりするとは言わない。むしろ一種の本性的な秩序をもって、種子のうちに内在する可能態として顕在しているのであって、決して他の本性が補填しているということではない。まったく同様に、人間の種も、存立の最初の発端のときに、本性の可能態を埋められたかたちで有しているとわれわれは理解する。ある種の自然本性的連関により、単純化また顕在化して、この可能態は完全なものへと進みゆくが、外界から何か発端の完全化のためのものを加えて取り込むというわけではなく、むしろ自らを完全なるものへと連関にしたがって導くのである。ちょうど、靈魂が身体より先にあるのではなく、また真なる身体が靈魂なくして存在するとは言えないのと同じように、それら双方にとって端緒は唯一であり、より崇高なるロゴスによれば、それらは神の最初の意向のうちに据えられている。別の言い方をすれば、その端緒は誕生の際の発端のうちに成立しているのである。

4. 四肢の分節化は、形成に先立つ身体の組み立ての設定のうちに見抜くことはできない。ちょうどそれと同じように、靈魂の固有性は、靈魂が働きに進み出るまでは、そのうちに認知することができない。関節と内臓の相違に関しては、誰も内に収められたものを区別することをためらうことがないが、それは何か他の力が加わるのではなく、内にあるものが本性的にその働きに転ずる

ためだという理由による。同様に、靈魂に関してもそこからの類推によって等しいことを想起することができ、たとえ何か表に現れるエネルゲイア・現実態によって判別することができないにしても、その内には何ら不足しないものがある。そして将来成立する人間の形相は、かの力のうちに存するが、非存在ゆえに人目を免れている。ただ必然的な連関に沿って、その外貌を現わしうる。同じように、靈魂もまたかのものの中では現れ出ないものの、自らに固有の、そして本性に沿っての働きを通じて現れ、身体的な増大に伴って進み出る。

5. 理解のための能力が確認できるのは、死者の亡骸からではなく、靈魂を有する生ける肉体からである。それゆえわれわれは、生けるものから生の発端に向けての前進は、死せる無靈魂のものではないと考え、合理性に反しはしないと言い得る。肉において靈魂を欠いたものは、必ずや死者でもあるからである。しかるに死性とは靈魂の欠如である。この点に関して、たとえ誰か、非靈魂性すなわち死性を靈魂よりも古くに遡るものだと論を立てる者があろうとも、欠如のほうが保有よりも古くに遡るなどということは主張しないであろう。

しかしながら、もし誰か、形作られた生命の端緒となる部位(靈魂)が生きているということの、より明瞭な証拠を探し求める者があるならば、靈魂を有するものが死せるものから峻別される他の徴を通じて、このことに関して思い巡らすことが可能である。われわれが、人間に関して生きているということの証拠となすのは、温かみがあるとか、力がこもっているとか、運動しているといったような点である。一方、身体に関して冷え切っていたり動きがなかったりするものは、死性以外の何ものでもない。6. というわけでわれわれは、述べ挙げるものに関して、それが温かかったり力がこもっていたりするのを目にし、それらの点をもって「靈魂を欠いてはいない」ことの証拠とする。けれどもわれわれが、身体の各部位、すなわち肉とか骨とか髪とか、人間性が認められる部分に関してそう言い表すのは、それら各々が働きの上でそうだからであって、見た目にどう映るかに基づいているのではない。同じように、靈魂を有した部分に関して、理性的なものや欲望的なものや憤怒的なもの、また靈魂をめぐって看取される限りのものが、それらにおいて場を占めているとは決して言わない。そこからの類推により、身体の形成と完成、そして靈魂の働きもまた、基体とともに増大すると考えるのである。

人間は、より大いなる事どもの中で完成される。それに伴い、靈魂の働きもまた顕在化してゆく。7. 同じように、形成の最初にあっても、身体は、現在

の必要に相応しく適合した靈魂の協働を自らの上に示しゆく。すなわち靈魂は自らのために、埋め込まれた質料を通じて、適合した住まいを形作るのである。われわれには、靈魂が他者の住居に適合するということが可能だとは思われない。それは蠟版の中の刻印が、他種の紋章に適合し得ないのと同様である。

8. ちょうど身体が、微細な部位から完全性に向かって進みゆくと同様、靈魂の働きもまた、基体に適合するかたちに備えられ、増大し成長する。靈魂の働きに先立つのは、原初の形成において、言わば何か土くれのうちに隠し込まれる根のような、成長そして生育のための力だけなのである。受け入れられるものの微細さは、何ら余分なものを容れるわけではない。しかる後、植物が光のもとに進み出て、太陽の下に芽を示すに至るや、感覚的な恵みが開花する。すでに成熟を遂げ、適合した背丈にまで至ったなら、さながら果実の如くにロゴスの力が輝き出始めるが、それでもすべてが瞬時に現れ出るわけではない。むしろ機能の完成に合わせて、熟慮とともに成長を遂げるのであって、常に、基体の能力が容れられる限りの分量だけを実りとしてもたらずのである。

9. もしあなたが、身体づくりのうちに靈魂の働きを求めるのであれば、モーセがこう言っている。「汝自身に注意を向けよ」と（申命記 15:9）。そしてさながら聖書におけるが如くに、靈魂の働きに関する経緯を読むことができるだろう。あなたには本性そのものが、どんな論述よりも明晰に、身体における靈魂の様々な働きについて、総則に関しても細部に及ぶ諸側面に関しても説明を施しているのだから。10. だがわれわれ自身のことに関して説明を施すのは、論述の上で余分だと考える。それは言わば、天上の諸驚異に関して陳述するようなものであろう。誰か、自らを見つめながら、固有の本性を論述によって学ぶ必要のある人があるだろうか。つまり、生のあり方というものは考え抜くことが可能なのである。それがすべての生の働きに対して、どのように適わしいあり方にあるかということに関しては、身体について学び、靈魂の本性的側面が、生成の最初の形成の際にどのような事柄に関わったかを通じて知ることが可能なのである。このような次第により、注意力散漫でない人々には、本性の作業場であって、動物の生成のために生ける身体から分離され挿入されたものは、死していないもの・無靈魂でないものとなるということが明らかであろう。

11. われわれは、果実の内実、根の接ぎ穂で死んでおらず、自らのうちに隠れた形ではあるが完全に生きた姿で原型の特性を留めているものは、これ

を本性に内在する生命力の下、大地に埋める。ところが周囲を取り巻く大地は、自らの内側より、そのような力を外側から補充して挿入するわけではない。樹木の死した部分でさえ、若枝に添えられるのであるから。むしろ、固有の樹液を通じて根、葉、髓、枝の別れた部分に至るまで育まれ、その植物を完成させるのである。このようなことは、何か自然の力が併せ入れ込まれないかぎり、生じえないことであろう。その力とは、すぐ傍らに存する同起源的で適合した栄養を、自らへと引き込む力である。その植物は、樹木、穀物、あるいは何か低木性の樹々となるのである。

第30章 われわれの身体の構造をめぐっての、若干医学的な考察。

(PG44, 240C) 1. だが人はみな、われわれの身体の正確な構造を自らに教えることになる。これはそれでもって見たり、生きたり、感じたりする器官に関してであり、自らに特有の本性を師として有していることによる。けれども、そのような点に関して見識を秘めた人々が、それらの事どもに関して詳細に吟味した研究を受け取るならば、すべてを正確に学び尽すことが可能となる。すなわち、われわれのうちなる各々の器官がどのような状況を有しているかについて、解剖学により学んだ人がいる。一方、身体中のすべての部位がどのような関係になっているかを考察し説明してくれた人もある。それは刻苦した人々が、その知が人間の構造について十分となるよう努めた結果による。だがもし誰かが、それらすべての事どもについて、いかなる点についても外界の声を必要とせぬよう、教会が師となることを求めるというのであれば(というのも主が述べているように、他の牧者の声を聞かぬことこそ、霊的な羊の群れの掟なのだから；ヨハネ 10:4-5)、手短にはあっても、これらの事どもについての論述を手がけてみることにしよう。2. 身体の本性に関しては、われわれの内なる部分が各々創造されているその目的を問うならば、それは三つある。すなわちそれは、生きるためのもの、善く生きるためのもの、そして後続の世代の者たちに相応しく継承するためのもの、である。まずわれわれのうちにあって、それなくしては人間的な生が成立することの難しい事柄とは、三つの部分において考察できる。まず脳髓のうち、心臓のうち、そして肝臓のうちである。しかるに諸々の善に関して、付加また本性の特質といえる限りの事どもとは、感覚に関わる諸器官を通じて、自然が人間に恵みとして与えた善く生きることである。というのも、そのような諸物が生命を成立させるわけではないからであり、それら諸器官に関しては、これを欠く人々も、しばしば見受け

られるからである。人間が存するのは生きることにおいてに他ならず、生において、快樂に参与する働きのなしでも生きることが不可能でない。しかるに三番目の視界とは、後続の、継承者たちに向かう視座である。承継のために、万人に共通のものとして備わっているものは、これらの他にも存する。それらは、自らを通じて相応しい付加をもたらす。それは例えば胃腸とか肺といった器官であり、後者は息吹によって心臓の周囲の炎を再点火し、前者は内臓に食物を貯蓄するためのものである。

3. このようにわれわれの身体の内部にある諸部位は分割されていて、次のことを正確に思い描くことができる。それはすなわち、生きるための力は、われわれのために何か一つの部位によって単独で取り仕切られているのではなく、自然は数多くの部位にわれわれの存立のための端緒を割り振っているのであって、各々の部位の一致した寄与を全体として不可欠なものとしているということである。その結果、生命の安全と美のために自然が案出していることは、これらよりもさらに多岐にわたり、相互に多くの違いを見せる。4. だがわたくしには、まず手短に次のことについて議論する必要があると思われる。それは生命の存立のために、原初の原理をしてわれわれに仕えしめてくれているものがある、ということである。まず、全身の質料は各々の身体の基体を成して共通であり、これに関して異論は出ないだろう。われわれの論述に関しては、一般的な自然論が部分的な考察に貢献するということはなからうからである。

5. さて、次の事柄に関する合意は万人から得られるであろう。それは、この世で要素の形をとり、われわれのうちに看取される事どもはすべて（熱いもの冷たいもの、その他湿ったもの乾いたものに関して考えられるペアなど）、その各々は一々、われわれによって論述されるべきだ、ということである。6. では、生命における三つの統御的力について見ることにしよう。そのうちのまず一つ目は、すべてを温かさのうちに保温する力、二つ目は、温められたものを湿分のうちに保湿する力である。それらはいわば、逆の特質を有するものの均等性により、動物をその中間において維持する力である。つまり、温かさが行き過ぎて湿分が乾ききってしまうことなく、一方湿分が上回りすぎて熱分が消散してしまわないように考慮されているのである。しかるに三つ目の力とは、自らを通じ、何らかの結合と調和とによって、関節で分割された部分を、自らの絆によって調節し保つ力である。これは全てに対して、自ら運動する自由意志的な力を遣わすものである。この力が枯渇すると、弛緩が生ずる。

そして一部が屍のようになるが、これは自由意志的な霊に与らなくなるためである。

7. むしろこれらの事どもより以前に、われわれにとって考察する価値があるのは、身体の創造能力そのものの内なる、われわれの本性の技術的側面である。硬さと反発性が感覚の働きを受け入れなくなると仮定しよう。するとわれわれの骨質において、また地中の植物において看取できるように、その中には生命の形相を、何がしか、育ち育まれることのうちに看取できるものの、逆にその基体の反発性は感覚を受け入れることがない。そのため、感覚的な諸力に対しては、何か蠟質の装置で下から支えてやり、それを受け取る型に刻印がなされ得るようにすべきなのと同様である。もっとも、湿分が超過する結果、混濁しないようにせねばならない。刻印されたものは、湿分のうちには原形を留めないからである。また硬さが甚だしい場合には、刻印ができない。硬すぎるものは、型として刻印され得ないからである。むしろ柔らかさと硬質との中間であるようなものが望ましく、本性的な働きのうち、感覚的運動という最も麗しきものに、動物が欠けることのないようでありたいと思う。8. というわけで、柔らかくたわめ易いものは、硬質のものからの働きを何ら受けけないなら、まったく運動せず分節化しないものとなるだろう。海に生息するクラゲのような動物である。それ故、自然は身体に骨質の硬さを混ぜ合わせ、骨は相互の適切な調和を通じて一体化して、まずは筋による絆で自らの結合部を繋ぐ。かくして自然は骨に、感覚を受け取る肉を備えさせた。この肉は、苦痛を被りにくく強力なもので、外見的には表面を網羅している。9. さてこのような骨の固い性質には、いわば重荷を担う柱にもたれるかの如くに、身体的全重量が寄り掛かっている。その骨は、全体にわたり分かたれないかたちで根を張っている。もし人間がその構造上、両足の受継ぎが前方へと運動を運ぶことがなく、また両手の支えが、生にとって有用なものでなければ、何か一か所に留まっている樹木のようなものになったことであろう。

ところがいまや、この組織は上述のような考慮により、柔軟にして活動的なものを基に、筋で張り巡らされた自由意志的霊によって組み立てられている。この筋とは、諸々の運動のために、刺激や力を身体に注入するものである。ここから、多彩にして多方面に向かい、あらゆる着想に適う両手の奉仕が生まれる。そしてここから、首の回転、頭の傾きと頷き、あごの働き、合図を意味する臉のまばたきが生じ、それ以外の関節の運動も、筋の緊縮・弛緩のうちに生じて働きを為す。その様はまるで、何か機械を見ているかのようである。しか

るにこれらを通じて浸透する力は、言わば命じられないままの刺激を有していて、自由意志による霊を通じ、言わば本性の経綸によって、各々のうちに働きを為す。筋によるすべての運動の根また端緒として明らかになるのは、脳髄を包む筋質の皮膜である。

10. かくしてわれわれはもはや、生命に関わる諸部位に関して、その中のどこに運動のエネルギーが示されるか、といった問いを立てることが必要だとは思わない。だが、生命に最大限関わるものが脳髄であるということは、これ以外に生じることが明瞭に示している。もし脳髄の巡りの皮膜が、何か傷や破損を被ったならば、直ちにその負傷に続き、結果として死が訪れる。たとえ束の間であっても、本性がその傷に抗することはできない。建物の土台が崩壊した場合、その建物全体が土台部分とともに倒壊する。同じように、脳髄が損傷を受けると、その動物全体が破滅することは明白であり、この部分すなわち脳髄が、生命の原因を有していることについては同意を得られるであろう。

11. さて、生命活動を停止したものにあっては、本性に内在している温かさが消えてしまい、靈魂を失って死体となる。それ故にわれわれは、体温のうちに生命の原因を考える。体温が失われると、死性がその後続くのであるから、必然的に「生きているということ」とは、このような体温の共在性であると必然的に認めねばなるまい。したがってわれわれは、そのような力の言わば源泉そして原因として、心臓を考えている。心臓から、パイプ状の管が多数枝分かれしつつ次から次へとつながっていて、全身に炎のような熱い霊を注ぎ込むのである。

12. しかるに総じて、本性的には何がしか食糧が体温のために存することが不可欠であろう。火は、相応しきものによって育まれない限り、自らによって持続することは不可能である。それ故に血管は、言わば肝臓あたりの泉に起点を有し、熱い霊に伴いつつ全身をめぐる。これは、相互に孤立して本性を破壊し、疾病と化すことのないようにするためである。十分に教育を授かっていない者たちも、自然から教えを受けている者も等しく、超過は破滅をもたらす疾病であるということを知るのがよからう。

13. しかしながら、神性が唯一自足的なものであるのに対し、人間の窮状は自らの生成のために外界のものを必要とする。したがって、すでに述べたように全身がそれによって統御されている三つの力を通じ、質料を外界より流し込んで、様々な入り口を通じてそれらに適うものを住ませる。14. すなわち血の源泉、つまり肝臓に、滋養物の調達を委任したのである。つまりこれに

よって、常に取り込まれるものを、血の源泉が肝臓と通じて沸々と涌き出だすように整えたわけである。それはちょうど、山頂に積もった雪が、固有の湿分のために、山麓に向けて流れつつ水量を増大させ、高低差を通じて、固有の湿分を下方の流れへと圧出するような如くである。15. さて心臓内の息吹は、隣接する内臓、すなわち肺と呼ばれる空気の容器から、口にまで届く内在気管を通じて導き入れられる。口が、外界の空気を呼吸によって吸い込むのである。心臓はその中央部にくるまれている、常動の火炎のエネルギーを模倣する形で、自らも間断なく運動する。ちょうどふいごが真鍮の中で為すように、自らに向け拡張により傍らの肺から引き寄せることで空洞を埋めつつ、自らの火炎性のものを駆動し、そこに置かれた気管に息吹を吹き込む。そしてこの器官はその行為を中断させることなく、外界からは拡張により自らの空洞へと引き寄せながら、自らからは収縮により気管に入り込むのである。16. わたくしには、われわれにとって呼吸が自動的なものになっている理由がこれであるように思われる。知性は、しばしば他の器官に比して多忙であるか、もしくはまったくもって沈静的であるかのどちらかである。だが眠りの際に身体が解放されても、空気を呼吸することは中断されず、それでいてこの点に向けて自由意志が協働することもない。わたくしが思うに、心臓が肺に取り囲まれていて、心臓が肺に接して背後の部分に備わっているのは、内臓を固有の拡張と収縮によって共動させつつ、大気の引き寄せと吸引を肺に設定するという目的によることであろう。何か薄いが多くの通り道を有するものが、気管の底部に向けてすべてが開口する空洞を備えていて、空洞部に取り残された息吹を凝縮させ繋ぎ合わせつつ、必然的に圧縮させ進んで行く。退いては開かれ、分散によって空虚に向け牽引によって大気を引き寄せるのである。17. そしてこれこそかの、自由意志によらぬ呼吸の原因、すなわち火炎的なものが静止することの不可能な理由であろう。運動に関するエネルギーとは、熱性の特質であるため、われわれはその端緒を心臓のうちに考えた。それ故この部位における止むことなき運動は、息吹を通じて大気の途絶えることなき振動と吸引を産み出すのである。したがって、本性に沿った形で火炎性が緊張すると、火を帯びたものの息吹が炎によっていっそう緊迫したものとなるが、その様はちょうど、心臓が急くと、そのうちにある炎が若い息を得て一瞬消えるときのようなのである。

18. だがわれわれの本性はどこか貧弱なものであり、自らの生成に関わる事物を、すべてにおいて事欠いているものであるから、固有の大気、息、熱性を呼び覚ますもの、外界より生命性の維持のために間断なく取り込まれるもの

を必要とするばかりでなく、身体の重量を支える滋養物を常に新たに必要とする。それ故その内容物は穀物と飲み物で満たされ、不足物を引き寄せる力と余剰物を排除する力を身体に取り込むが、この点に関して心臓内部の火炎性は、小さからざる協働を、本性に提供する。19. 生命性を有する部位の最も支配的な部分は、所与の論理に従い心臓であるが、これは熱い氣息によって、各々の部位を焚きつけ、四方にわたって心臓がその活動的な力の発動体となることを意味している。われわれの創造主は、この部位のいかなる部分も、万物の経緯にとって無為で無益なまま放置されることないように計らったのである。それ故背後には肺を基底に据え、止むことなき運動を通じて、自らへと内臓を引きつけ、大気を牽引するために気道を拡張させる。その一方で、拡充が極まると、内に取り込んだものを再度吐き出すべく備える。もっとも自らの前面の部位の中では、腹部上部の余地に据えられているために、心臓を熱いもの、また固有のエネルギーに照らして運動するものとしている。氣息の吸引に向けてではなく、相応しき滋養物の受け入れに向けて覚醒するのである。氣息と食糧の入り口は互いに隣接しているためである。それらは相互に、その及んでいる長さに関して平行に、等しい長さで上に向けて延びている。結果的にそれらは、双方とも口の部分で繋がっており、一つの口でこれら二本の管は終止する。かくしてその入り口は、食糧のためのものであるとともに、呼吸のためのものでもある。20. だがその底部にあっては、もはやまったく、これらの管の共伴性の適性は同一ではない。というのも双方の座の中間部にあっては、心臓が入り込んでいて、一つは呼吸のため、もう一つは食糧確保のためにエネルギーを注入する。なぜなら火炎性のものは、火気を帯びる質料を求める性質を持つためである。この点は実に、食糧の入れ物をめぐって必然的に生じる事柄である。隣接するものの熱さゆえに火炎性を帯びる限りにおいて、それは一層、温かさを育むものを引きつける。ちなみにそのような衝動性を、われわれは食欲と名づけている。21. だがもし、食糧を含む器官が十分なだけの質料を捉えたなら、火炎のエネルギーはもはや、これまでのように沈静化してはいない。むしろ、さながら炉において質料の溶融を行うかのように、生成したもの・流出するものを峻別する。そのさまはさながら、漏斗からそれに続く管へと注ぎ出すような具合である。しかる後、純度の高いものからより粗雑なものを選び分け、まず微細なものは、パイプ状のもので肝臓の入り口にまで導く。一方食糧の中で質料性の沈殿物については、内臓の中でより広い道にむけて押し分け、時間をかけてその様々な回転法を使って反芻しこの食糧を内臓の中に留め

る。それは、管が直線状すぎて簡単に排出されてしまっ、その動物を直ちに衝動へと突き動かすことのないようにするため、そして人間が、理性に与っていない動物の本性に倣って、上述のような業を放棄することのないようにするためである。

22. しかるに肝臓は、とりわけ、湿分の多いものを血液化するために、熱の協働を必要とする。そこで創造主はこの役割を場所的に心臓から遠ざけ(というのも思うに、心臓は生命力の端緒また根であり得るが、他の端緒としても多用であり得る)、経綸のある部分が、温かい実体の離反のために損なわれることのないようにする。筋状の管(この方面の識者によれば、これは気管と名づけられている)は、心臓から火炎性の氣息を受け取り、これを肝臓に送り、湿分の入り口の傍でこの口と邂逅し、温かさを通じて湿性を活かし、炎との同起源性のいくばくかを湿分のうちに含ませ、血の形相を、赤紫色の色彩でもって染め上げるのである。23. しかる後そこから、いわば双生児性の管が発し、その各々が自らの霊と血液とをパイプ状に囲み、通りやすくする。湿分、そして熱の運動によって空虚となったものも道程を同じくし、全身に向けて多く枝分かれしながら散らばる。管に幾多の出発点と分岐点があり、すべての部分に関して枝分かれするのである。

けれども生命力の二つの端緒は相互に混淆しており、それは全身に一様に温かさを送り込む力と、湿分を送り込む力である。言わばちょうど、やむを得ぬローンを、家産の中から、生きるためのより根源的な力でもって支払うようなものである。24. これが、皮膜と脳髓に関して看取される本性であって、この本性から関節のあらゆる運動、筋肉の伸縮、すべての自由意志的な霊が、各々の部位に送り込まれ、働きをなし、運動して、われわれの土製の彫像を、言わば何か装置に拠るかのごとくに現出させるのである。温かさのうちには最も純粋なものが、湿分のうちには最も微細なものが、双方の力から何がしかの混合・混淆によって一化され、脳髓を蒸気によって育み成立させるのである。そして今度は、ここに発した分配が最も浄らかな形に微細化され、脳髓を覆う皮膜を拡げる。この皮膜は、上部から底部まで薄く伸び、一つづきの脊椎によって自らとその内にある髓とを管轄し、背骨とともに段階的に終わる。骨と関節のすべての結合部、および筋肉の始まりの部分に、いわば一人の御者の如くにそれぞれの運動・停止のための合図と力を与えるのである。25. それ故にわたくしには、これにはより安全な防御が相応しいように思われる。頭部に関しては二重の骨の覆いで円形に捉えられているのに対し、背中については、

背骨の覆いと形態上多種のものの混合によって覆われている。それは脳が万全に疾病や傷害から保護されるためであり、脳を包摂する防御を通じて安全性が維持されるためである。

26. ある人が心臓について同様に推測し、次のように考えるかも知れない。すなわち、ある家がしっかりと堅固な建材によって支えられ、骨材を環状に張り巡らして固定されたとしよう。背後には背骨があり、これが両側から安全に守られている。また、その両側にはあばら骨の骨格が脇腹を環状に取り囲み、中央部が損傷を被らないようにしている。一方前面には、胸と鎖骨の繋がりが構築されていて、言わば心臓の周囲全面に関して、外界から衝撃を加えるものに抗し、安全性を確保しているかのようである。

27. ちょうど農業に関して看取されるように、厚い雲からの降雨、すなわち管への流入が、基体を湿度に満ちたものにするのと同様である。記述のため、言わば庭のようなものを想定しても良いかもしれない。その中には幾多の異なった樹木が育ち、大地から生え出たありとあらゆる種類の美しき草花を、自らのうちに育てている。その草花の形、性質、色彩の特質は、様々な変化をもってその各々のうちに看取される。一つの場所で、湿分によって育まれるものの数は非常に多い。各々の部位を基底から湿らせる力は、その本性上一つである。しかるに育まれるものの特質は、その湿分を多様な性質へと変化させる。同一のものが、ニガヨモギにあっては苦くなる。ドクニンジンにあっては、腐敗をもたらす樹液へと変質する。さらに物が変われば別物となり、サフラン、バルサム、ケシによってものが異なる。つまり、あるものでは温められ、あるものでは冷やされ、あるものではその中間の性質を有するのである。また月桂樹、イグサ、その他その類のものでは芳香を放つが、イチジクや洋ナシでは甘くなる。ブドウの樹を通じてはブドウの房とワインができる。リンゴからはジュース、バラからは顔料、ユリからは光料、スミレからは暗色料、ヒアシンスの染料からは紫色の色素が取れる。その他、大地より生ずるものすべてに関してこの種の事柄を看取しうる。すなわち、唯一の同じ湿分から発して、その形、形相、そして性質に関してこれほどまでに大きな差違へと分かたれるのである。

このような事柄が、われわれの生ける耕地において、本性により、否むしろ創造主の本性により、驚異として行われた。骨と軟骨、血管、気管、筋、靭帯、肉、皮膚、脂肪、毛髪、鼠径部、爪、眼球、鼻、耳、この類のものすべて、さらにこれらに加え、様々な特質でもって互いに分かたれたその他幾多のもの

が、唯一生命というアイデアにおいて、自らの本性に適う形で育まれている。基体の各々に滋養物を近づけるのであり、それに近づけられるように、それに即して異化もし、その部位の特質に固有のまた適切なものとなるようにしている。眼球に関してであれば、視覚に関わる部位に混ぜ込まれて、眼球の周囲の皮膜の相違に相応しく、各々に分配される。一方もし聴覚に関わる部位に溢れ出るなら、聴覚的本性に混じり合う。唇のうちに入るなら、唇となる。骨のうちに固着し、髄のうちに柔らかくなり、筋とともに鍛えられ、様相を覆う形に張られ、爪に伸び、毛髪を産むように、適した水分に繊細となる。もし、ねじれた管を通じて運ばれたなら、よりねじれてカールした髪の毛を生え出ださせる一方、直線的な管を通るなら、髪の毛を生成する蒸気の通り道となって、伸びた直線状の本性を送り込む。

28. しかしながらわれわれの論述は、課題から大いに逸れてしまった。本性の業に深く沈潜し、それを記述しようと試みながら、われわれの各々の部位が、最初の分割の際に、生きるため、また善く生きるために、どのようなものから成立し、さらにその後どのようなことが生じたかを考察し始めたのであった。29. われわれが自らに課した課題とは、われわれの構造が種子的事であることの理由を示すことなのであった。霊魂が非物体的である一方、身体が霊魂を欠くわけでもなく、むしろ動物が、霊魂を有し生命を持つ身体を基に生き、最初の段階から霊魂を有する生物として誕生したということを実証することであった。人間の本性が、言わば養育者の如くに、自らに固有の力をもって霊魂を育むことであるということは受け入れられた。しかし育まれるのはその双方によるのであり、各々の部分に相応しい形で成長を明らかにすることになる。このような技術的で意識的な形成を通じて、本性は、自らのうちに織り込まれた霊魂の力を示すことになる。最初の段階ではやや不鮮明な形で明らかにされ、次第に、器官の完成と歩調を合わせて輝きを放つことになる。

30. 例えば彫刻家の場合にこのパターンが看取される。すなわち、彫刻技術者にとっての課題とは、ある動物の姿を石に彫って写し取ることである。この動物を前に置いてから、まず彼は適合した質料の石を切り出す。しかる後その石の表面を打ち、目標とするものの模倣でもって最初の形から彫り出してゆく。その結果、でき上がってくる姿を通じて、不慣れな者であってもその技術が目指すものを推測することができるようになる。彫刻家は続けて細工を凝らし、目指すものに似た形へとさらに近づけてゆく。こうして彼は質料に、完全にして正確な姿を彫り込むと、到達点(ペラス)に向けて技巧を凝らす。こう

して、少く以前には特徴のない石であったものが、獅子だとか、あるいは何であれ技術者の手を通してでき上がって来るものとなる。これは質料が形相へと変貌するのではなく、質料から技巧によって形相が浮かび上がることによる。

靈魂に関してこのようなことを当てはめて考えてみても、あながち外れているとは言えまい。われわれは、同起源性の質料から技巧を凝らしすべてを編み出す本性が、自らのうちに、人間に発する一部を取り込み、彫像を創造するという言い方をし得る。石からの彫像制作過程において、われわれは、最初の段階ではおぼろげながら、制作の最終的段階ではほとんど完成した姿で、その姿を辿ることができる。ちょうどそれと同じように、器官の彫刻にあっても、靈魂の形相は、基体からの類比によって立ち現れる。不完全なものの中には不完全性が、完全なものの中には完全性が明らかになるのである。だが悪を通して本性が削られるのでなければ、当初より完全なものであるはずである。それ故、情動を被る獸的な起源との共同性は、被造物における神的な像が直ちに輝きを放つようにはせず、むしろ何らかの道筋と連関を辿り、靈魂の質料的でより獸的な特質を通じて人間を導く。31. このような教説は、かの偉大な使徒も『コリントの教会への書簡』において教え、こう述べている。「わたしは幼子だったとき、幼子のように話し、幼子のように考えていた。だが、成人になったとき、幼子の事どもを棄てた」(1コリント 13:11)。少年の中で知的活動をしているものとは別の靈魂が、成人の中に加わって入って来て、より子供じみた思惟が停止し、成人した思惟が根づくというわけではない。むしろ同じ靈魂において、幼子にあっては不完全だったものが、成人においてはその完全性を示すのである。32. われわれは、植えられ成長するものは「生きている」と表現する。それはこれらがすべて、生命と本性的な運動に与かっているためである。それらの生命が完全な靈魂に参与しているとは言えないからという理由で、これらのものを「靈魂を欠く」と言う者はないであろう。というのも、植物にはいわば「魂的な」エネルギーが備わってはいるが、感覚に関わる運動にまでは至っていないからである。だが逆に、理性に与からない動物には、これに魂的な力(デュナミス)が加わり備わっているが、その靈魂も完成には到達しておらず、理性と思惟の恵みを自らのうちに容れてはいない。33. それ故われわれは、真に完全な靈魂とは人間の靈魂であると言うが、それは、人間の靈魂があらゆるエネルギーを通じて識別されることによる。だがもし何か他のものが生命に与っているとして、慣習上の類比的転用語法により、われ

われがこれを「靈魂を有するもの」と呼ぶとすれば、それはこれらのうちに、靈魂が完全な形で存するためではない。むしろ何か靈魂の働きの一部があり、モーセによる神秘的な人間起源論によれば、それが人間のうちにも据えられたということを、われわれが情動を被ることへの自らの近さを通じて学び知っているためである。それ故かのパウロは、完徳のうちに留まることについて聞き知りたいと欲する人々に勧告しつつ、どのようにすれば、努力している事柄を手に入れることができるか、その方法について提示し「古い人を脱ぎ捨て新しい人を着よ、創造主の像に倣い新しくされることによって」(コロサイ 3:9-10) と述べているのである。

34. だがわれわれは皆、神が当初、人間をそのうちに創造した、その神にもまごう恩寵へと立ち戻ることになろう。神はこう言っている。「われわれは、われわれの像としてまた似姿として人間を創ろう」(創世 1:26) と。この方に栄光と力とが世々としえにあらんことを。アーメン。